造　形　秋　田

NO.49　（平成24年度）

2013.3

秋田県教育研究会造形部会
秋田県造形教育研究会

第57回東北造形教育研究大会秋田大会並びに第39回秋田県造形教育研究大会秋田市大会を終えて

秋田県造形教育研究会
会長　芦　原　清　巳

第57回東北造形教育研究大会秋田大会並びに第39回秋田県造形教育研究大会秋田市大会が秋田市で開催され，秋田県内・東北各地より造形教育に携わる先生方や関係者の方々，約270名のご参会をいただき，7月26，27日に盛会裡に終了したことを心より感謝申し上げます。

秋田市造形教育研究会が中心となり，準備から開催まで約2年間，組織づくり，研究推進体制，授業者決定，講演会講師招聘，会場校・全体会場施設設定に至るまで会員一丸となって奮闘してきました。当初から東北大会を意識し，秋田県らしさを全面に打ち出し，郷土の伝統や文化を継承しつつ，造形教育を通した「人・モノ・ことのつながり」を大切にしながら，自らの感性を磨き，つくりだす喜びを味わい，生きる輝きを見い出すことを目標としてきました。

会場については，秋田大学教育文化学部附属小・中学校を主会場に，秋田市立赤れんが郷土館，現秋田県立美術館，新秋田県立美術館，秋田市にぎわい交流館ＡＵなど市内の造形教育に関連する施設を借用した大変，環境的にも恵まれた大会となりました。記念講演では秋田蘭画研究の第一人者である学習院女子大学教授，今橋理子先生をお招きし，「直武・百穂・狩野亨吉～秋田蘭画をめぐる知の共同体」と題して，百穂たちが秋田蘭画を再発見し，世に広めた経緯をまるでミステリーの謎解きのように解説していただき，秋田蘭画誕生の原点を垣間見ることができました。

公開授業では，大会主題「生きる輝き，つくりだす喜び～内面から湧きあがる造形活動を求めて～」のもとに感動をよぶかかわりを核として，つくる喜びを味わい，表現に没頭する子どもたちの姿を目指しました。研究の重点として身体感覚を揺り動かすような「題材とのかかわり」と学習活動の中での「温かい励まし」の2つに視点を置き，研究に取り組んできました。小1（ながーい　ふわふわ　ぐーるぐる）と小3（入って，入って，みーつけた！）の元気でダイナミックな授業，小4（キラめいて　わっしょい！）と小6（森のクリエイター）の素材や材料を生かした楽しい工作，小4（勝平得之の木版画）と中2（藤田嗣治の大壁画）の美術館での鑑賞授業は圧巻でした。中1（モビール）と中2（絵本）の制作では中学生らしく，真摯で無心に取り組む姿が印象的でした。

また，協議会では，小・中学校だけではなく，幼稚園，特別支援学校，高等学校の実践発表も含めた7つの協議会を設定し，造形教育活動の輪をさらに広げるために，より連携を強化し，提案することができました。

前日の東北造形教育連盟理事会では，ここ5，6年途絶えていた各県の実践交流や指導助言者の交流を再開しようという提案があり，来年度から取り入れていくことになりました。ここ数年，東北大会を開催するにあたり，主催県ですべて司会，提案者，指導助言者などを選出し，主催県で完結する形をとってきていました。今後は各県の普段の実践交流や研究の取り組みなどを意見交換することに意義があり，お互いの情報交換を活発に行うということが全会一致で決まりました。各県との交流が盛んになれば，今後の造形教育の未来につながり，新しい風を吹き込み，益々活性化されることと思われます。

レセプションでは約100名が参加し，秋田の地酒で歓迎し，大いに盛り上がりました。東北6県の先生方と造形教育，学校教育に関して様々な生の情報を交換することができました。他県での斬新な取り組みを聞いたり，悩みなどを共感できる大変よい機会を得ることができました。造形教育を通して「人とのつながり」ができる本当に有意義な場となりました。

大会運営については，大会会場が5会場と分散したために，ご参会の皆様方には大変不便をおかけしたのではないかと思われます。また，秋田市の造形会員だけでは各会場等での人数が足りず，全郡市からの応援をいただき，オール秋田体制でようやく開催することができました。他県からご参会の皆様方からは，秋田市中心部に美術館や公共施設などが密集しており，造形教育活動をするにあたっては大変便利な環境であり，逆にうらやましいという声なども聞くことがきました。

本大会を終えて，いろいろな課題も見えてきましたが，それにあまりあるほどの成果も得ることができたのではないかと思います。授業や分科会を通して県内・県外からの声を聞くことは私たちの成長につながり，ひいては子どもに還元されることになります。また，造形教育の研究大会ではあるが，他県からは全国学力トップ級の図工・美術の授業として見られる傾向もありました。他県から参観した先生方からは，秋田県の子どもたちは学習の本質ができている。その上で造形教育がうまく機能しており，大変理想的であるという声も聞くことができました。

私たちが造形教育を通して培うもの，「人・モノ・ことのつながり」を大切にし，感性を見いだし，自分を発見し，表現することが少しずつ実を結んできたのではないかと思われます。本大会が着実に，その方向に向い，進んでいるものと確信しております。本大会の成果を今後の秋田県大会，6年後の東北・全国大会へと継承していくことを切に願っている次第であります。

最後になりましたが，本大会開催にあたり，いろいろな面でご支援ご協力下さいました秋田県教育委員会，秋田市教育委員会，さらに公開授業，実践発表を提示して下さいました秋田市の先生方，貴重な提言をして下さいました指導者の皆様方，運営にあたられました会員，関係諸機関の皆様方に深甚なる敬意と感謝を申し上げ，あいさつと致します。

造形秋田

No.49

目　　次

巻頭言

第57回東北造形教育研究大会秋田大会並びに
第39回秋田県造形教育研究大会秋田市大会を終えて

各郡市造形教育研究会の活動報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第53回　秋田県児童生徒美術展 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

第53回　秋田県児童生徒美術展　話題作一覧（平面の部） ・・・・・・ 12

研究の記録

第57回東北造形教育研究大会秋田大会を終えて ・・・・・・・・ 19

第57回東北造形教育研究大会秋田大会
第39回秋田県造形教育研究大会秋田市大会 ・・・・・・・・・・・・・ 20

A：小学校造形遊び ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25

B：小学校表現 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

C：小学校鑑賞 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

C：中学校鑑賞 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

D：中学校表現 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

E：幼稚園実践研究 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35

F：特別支援学校実践研究 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36

G：高等学校実践発表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38

記念講演 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39

全国大会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51

平成24年度　秋田県造形教育研究会役員 ・・・・・・・・・・・・・・ 54

表紙絵　わたりガニと、あそびたいな
みかだ　あおい（花輪小学校）

各郡市造形教育研究会の活動報告

鹿角市造形教育研究会

会員数　15名

組織　会　長　石　岡　ひな子（尾去沢小学校校長）
副会長　関　　清　志（十和田中学校）
事務局　海　沼　智恵子（尾去沢小学校）
会　計　海　沼　智恵子（尾去沢小学校）

主な事業

平成24年度総会（花輪第一中学校）　4／26	第57回東北造形教育研究大会　秋田大会 第39回秋田県造形教育研究大会　秋田市大会 参加　7／26・27
県児童生徒美術展鹿角審査会　12／3 （花輪市民センター）	・鹿角小・中・高合同美術展　1／19～1／23 ・絵を見合う会　1／23 （花輪市民センターホール）

研究会の記録

・第57回東北造形研大会秋田大会，第39回秋田県造形研大会秋田市大会に６名の会員が参加した。そのうち２名が，当日の大会運営補助の役員として携わった。公開授業などから多くのことを学ぶことができ，会員にとっても大変有意義な大会であったと思う。

・県美術展後に花輪市民センターにて鹿角小・中・高合同美術展を開催した。県出品作品の推奨作品（話題作含む）も紹介でき，250人を超すたくさんの方に観覧していただけたことが大変喜ばしかった。

・郡市美術展撤去作業の日に「絵を見合う会」を開催した。大北造形研会長である永井孝久先生を講師として招き，県美術展に進んだ各地区の作品の傾向や，鹿角の作品を参加者で一緒に観て回り，指導する際の留意点など貴重なお話をいただいた。今回が２回目となる「絵を見合う会」だが，造形会員だけでなく各校からの撤去協力教員も多数参加しており，ぜひ今後の指導に生かしたいと好評で，大変充実した会となった。来年度以降も継続していきたいと考えている。

「絵を見合う会」の様子　（1／23　花輪市民センター）

大館北秋田造形教育研究会

会員数43名

組織

会　長	永井孝久（雪沢小学校）		
副会長	木村　伸（大館東中学校）	金澤裕子（大館南中学校）	
	本間いま子（鷹巣南小学校）		
事務局	佐々木亜希子（大館第一中学校）	鈴木正樹（鷹巣中学校）	
研究部	工藤明美（鷹巣南中学校）	藤嶋聖人（鷹巣中央小学校）	
会　計	佐々木由美（比内中学校）	藤嶋幹子（鷹巣東小学校）	

主な事業

平成24年度総会（鷹巣中学校）　4／18

秋田県児童生徒美術展地区審査会
素描集「北の造形」第45集審査会
（田代公民館）　11／21

第34回　絵を見て語る会　理事会
素描集「北の造形」第45集発刊・配布
（田代公民館）　1／18

研究会の記録

○大館北秋田造形教育研究会では、隔年で実技研修会を開催しているので、今年度は研修会は開催せず、かわりに第57回東北造形教育研究大会秋田大会、第39回秋田県造形教育研究大会秋田市大会になるべく多くの会員が参加するよう呼びかけた。結果、たくさんの会員が秋田市に足を運び、様々な施設を活用した新しい授業の実践例を学ぶことができた。

○秋田県児童生徒美術展地区審査会では、それぞれの学校が工夫を凝らした実践から生まれた生き生きとした作品の中から、県の美術展への推薦作品を選んだ。審査の基準として、①子どもの心があふれているか（自分の気持ちをいかに素直に表現しているか）②創意工夫や新しい表現に挑戦しているか（その子ならではの表現・その子なりに工夫した表現がなされているか）③のびのびとして勢いが感じられるか　という３点を重視しながら審査した。その中で、美術展に応募したのに１点も入賞しないという学校があれば不公平感が生じるのでは、という懸念から１点も入賞しないという学校がなるべく出ないように配慮したため、全体的な作品の質の低下がみられたのではという指摘もあった。我々教師の作品を見る目を鍛えていく必要があると同時に、日々の実践でより上記３点を意識して子ども主体の授業をプロデュースしていかなくてはならないという意見があった。

○ 素描「北の造形」展では、「素描」の定義を再確認し、小学校・中学校の各学年における指導や作品例をまとめた指導方法を提案するＣＤを発行し、それをもとに各学校で児童・生徒が生き生きとした線で表現できるよう指導にあたった。素描は造形の基礎となるもので、本物の能力として子どもたちに定着し、人生を豊かにするものなので、何度も繰り返し試行させて素描に親しませたいと感じている。

能代・山本造形教育研究会

会員数27名

組織

会長	佐々木 彰子	(山本中学校)	
副会長	田中 範子	(向能代小学校)	長浜 笑子 (八竜中学校)
会計監査	田森 舞	(能代南中学校)	芹田 亨 (東雲中学校)
事務局	渡部 悦子	(能代第二中学校)	
理事	青山 則子	(能代第一中学校)	越前 芳広 (第四小学校)
	岩谷 修一	(藤里中学校)	小森 哉子 (藤里小学校)
	沼田 桃子	(能代東中学校)	大高 洋子 (二ツ井小学校)
	梅田 由美子	(金岡小学校)	金子 洋子 (下岩川小学校)
研修班	田森 舞	(能代南中学校)	芹田 亨 (東雲中学校)

主な事業

○夏季研修会
ストーリーからイメージを膨らませて
つくるアンサー作品づくり　7／26
【新企画：小・中・高連携による造形活動Ⅰ】

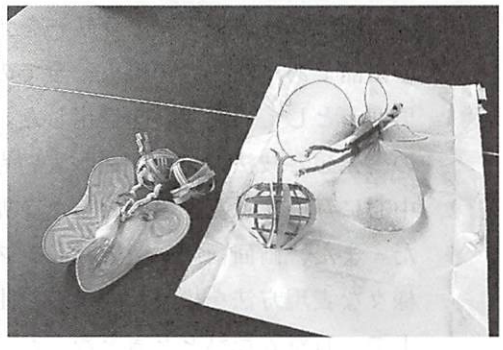
○授業研究会
「くしゃくしゃがみから　うまれたよ」
三種町立琴丘小学校　第1学年
指導者：三浦智子教諭　7／15

○秋田県児童生徒美術展審査会
12／12

○能代地区高校美術作品展への出品協力
【小・中・高連携による造形活動Ⅱ】 2／15～17

研究会の記録

○夏季研修会



新企画「小・中・高連携による造形活動」を立ち上げ，高校教員（能代西高：宮腰幸恵教諭，能代高：阿部純恵講師）を講師に招き，小・中の教員対象のワークショップ（実技研修）を行った。

テーマは「はらぺこあおむしくんはなにを食べたの？」である。ストーリーからイメージを膨らませて段ボールや紙粘土，カラーストッキングなどを用い，「あおむしが食べたリンゴ」「そのリンゴを食べて蝶に変身！」などのアンサー作品づくりに挑戦した。

２月に行われる能代地区高校美術作品展には，各校で制作した小・中学生の作品も展示する予定である。「小・中・高連携による造形活動」の一端を地域にも発信していきたい。

○授業研究会

三種町立琴丘小学校にご協力を頂き，１学年「くしゃくしゃがみから　うまれたよ」の授業を公開した。薄い色紙を「ねじる」「つつむ」「きる」「まるめる」「つなげる」などの工夫を加えて，自分のイメージするものをつくる学習である。

イメージが湧くような声かけや互いに認め合う場の設定が効果的で指導が工夫されていた。導入では，好きな色を選択する際に，「なぜ」と問いかけることによって，色とイメージを組み合わせることができていた。また，研究会では，「子どもがイメージをつかみとる支援の工夫」「子どもが自主的に活動するための支援」の二つの視点から，ワークショップ形式で有意義な討議が行われた。

男鹿市造形教育研究会

会員数８名

組織　会　　長　西　村　　隆（船越小学校）
　　副会長　中　川　　努（男鹿東中学校）
　　事務局　伊　藤　　覚（男鹿南中学校）

主な事業

造形部総会（4／11）

教科部会研修会（10／17）

男鹿市児童生徒美術展審査会（11／28）

男鹿市児童生徒美術展（11／29～12／12）

研究会の記録

（1）研究主題　　生き生きとした造形活動をめざして

（2）活動の概要

①　男鹿市児童生徒美術展審査会

男鹿市ハートピアギャラリーを会場にして、作品審査会を行った。平面作品157点、立体作品27点の出品であった。今年度も、全ての小・中学校からの出品がなされた。平面作品の中から１点ずつ、男鹿市としての話題賞を選出した。こどもの感じ方を第一に語りながら、思いがよく伝わってくるもの、発想と技法のバランスがよいもの、そしてふるさと賛歌を感じさせる題材について、造形部員を中心に互いに意見を出し合った。児童生徒の表現意図や、筆遣い・できばえを語り、感性を認め合った。また、画面構成や色のバランスの分析を通して、指導技術の情報交換もなされた。指導者として様々な表現方法を模索しながら、生徒の制作意欲を高め、イメージを広げさせる提示の工夫を考える上で、有意義なひとときとなった。終始和やかな雰囲気の中で審査を行い、考えるための視点を交換し、研修を深めることができた。

②　男鹿市児童生徒美術展

午後からの審査会後、直ちに展示作業に入り、夕刻に完了。翌日からハートピアギャラリーで男鹿市児童生徒美術展を開催した。気候の急変、寒波襲来にもかかわらず、我が子の作品を一目見ようという参観者が多数訪れた。多くの作品を前にして、感慨を語る様子が見られた。

潟上・南秋造形教育研究会

会員数20名

組織

会　長	工藤光男（東湖小学校）	
副会長	佐藤　恵（八郎潟中学校）	
運営委員	伊藤　晃（井川小学校）	菅原　恵（追分小学校）
	石塚博子（五城目第一中学校）	近江和佳子（羽城中学校）
事務局	都留賀津人（天王南中学校）	

主な事業

・総会	4／18(水)
・運営委員会	5／29(火)
・夏休み造形教室	8／6(月)
・教科等研修会	11／1(木)
・子どもの絵を語る会	12／12(水)

研究会の記録

(1)　研究主題　　よろこび・わくわく　新たな発見　～キラリ感じてつくる子ども～

(2)　活動の概要

①　夏休み造形教室

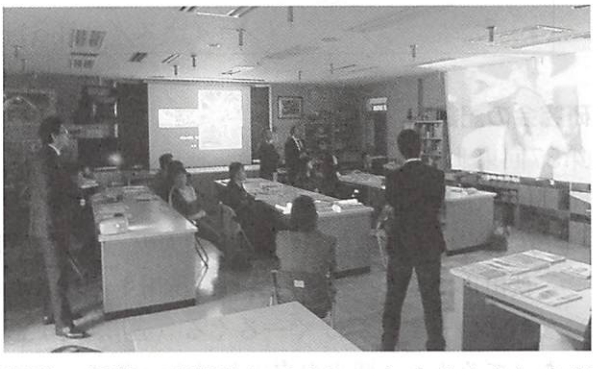
◆会場　　五城目町野鳥の森

◆内容　　木の実，木の枝などを使ったオブジェの制作

◆対象　　潟上・南秋地区の小学生

◆所感　　自然豊かな環境のもと，学校ではなかなか得られない子どもの興味を引く豊富な自然素材と充実した工具，造形部員のアドバイスがあり，子どもたちが材料から豊かに発想したり，発想を生かした作品作りを楽しんだりすることができた。

②　教科等研究会



◆会場　　総合教育センター

◆講師　　総合教育センター
　　指導主事　　大野一紀　　先生

◆内容　　「鑑賞の授業づくり」

◆所感　　図工・美術の学習指導要領の内容を確認しながら，要点となる「鑑賞指導の重視」と「言語活動の充実」を授業でどう展開していくかについて，豊富な資料と具体例を用いて講義していただいた。教科経営，授業に直接生かせるヒントを多く含む内容であった。図工・美術の授業をとおして児童生徒の感性を豊かに育てていきたい。

③　子どもの絵を語る会（秋田県児童生徒美術展地区審査会）

◆会場　　潟上市昭和公民館

◆内容　　県児童生徒美術展の作品審査と，子どもの絵の見方研修

◆所感　　会員相互の対話を通して，これまでの経験を生かしたり，会員自らの目を信じたりして審査を行うことができた。また，絵のとらえ方や指導技術の情報交換など，審査の枠を越えた話し合いも自然になされた。

秋田市造形教育研究会

会員数54名

組織

会長	佐藤一彦（秋田北中学校）		
副会長	加藤義昭（川添小学校）		
	榎　美和子（浜田小学校）		
	小松文子（飯島小学校）		
	加賀谷政広（城南中学校）		
事務局	中村紀幸（外旭川小学校）	黒沢　淳（泉小学校）	
	菊地有希子（大住小学校）		
幹事	小林さおり（御野場中学校）	伊藤知佐子（土崎中学校）	
会計	松田由紀子（外旭川小学校）		

主な事業

授業研究会
東北大会事前授業研究会
（市内各会場／5月23日）

大森山動物園
第35回親と子のふれあい写生大会
（大森山動物園と共催／7月28･29日）

第57回東北造形教育研究大会　秋田大会
第39回秋田県造形教育研究大会　秋田市大会
【7／26～27：秋大附属小・中，（現）県立美術館，赤れんが郷土館】
秋田市にぎわい交流館ＡＵ，秋田キャッスルホテル

秋田県児童生徒美術展秋田市審査
（秋田北中学校／12月１日）

東北造形教育研究大会報告会議
（ジョイナス／２月６日）

クロッキー巡回展 ： 市内各小学校
（審査：港北小学校／12月26日）

研究会の記録

第57回東北造形教育研究大会　秋田大会
第39回秋田県造形教育研究大会　秋田市大会
【7/26～27：秋大附属小・中，（現）県立美術館，赤れんが郷土館】
秋田市にぎわい交流館ＡＵ，秋田キャッスルホテル

ながーい　ふわふわ ぐーるぐる（造形遊び）	旭南小学校	１年	大野由加里先生
あけてみよう　勝平得之のとびら（鑑賞）	附属小学校	４年	齋藤知佳子先生
鑑賞「秋田の行事」（鑑賞）	附属中学校	２年	奈良　隆一先生
入って入って　みーつけた！（造形遊び）	大住小学校	３年	菊地有希子先生
キラめいて　わっしょい（絵・立体・工作）	港北小学校	４年	築瀬　智美先生
森のクリエイター（絵・立体・工作）	勝平小学校	６年	岩野ひとみ先生
はらぺこあおむし動物園に行く ～コラージュで絵本をつくろう～（絵やデザイン）	外旭川中学校	２年	鎌田政美先生
風を感じて　～モビールをつくろう～（彫刻や工芸）	御所野学院中学校	１年	小柳紀恵子先生

本荘由利造形教育研究会

会員数28名

組織

会　長	石井　真理子	(象潟中学校)
副会長	齋藤　千景	(北内越小学校)
	赤川　祐輝	(本荘北学校)
事務局	木内　衛	(本荘東中学校)
研究部長	菊地　邦彦	(矢島中学校)
運営委員	進藤　亨	(亀田小学校)
	藤原　和彦	(鶴舞小学校)
	安保　純	(仁賀保中学校)
会　計	宮田　幸江	(子吉小学校)

主な事業

平成24年度造形部総会	造形部研修会　12／7
本荘由利児童生徒美術展　11/20～23	その他　本荘由利小中学校の図工・美術の研究授業への参加

研究会の記録

1．はじめに

各校の教科研究の中で造形部員がそれぞれ研修を進め、地区の研究会などで実践や児童生徒の作品を発表し合い研究を深める。また、隔年で行われる教科別研究集会や市教委主催の夏期研修会、研究部会、児童生徒美術展、秋田県児童生徒美術展の平面審査への参加など様々な形で積極的に研修を持つ。

特に児童生徒美術展は各校の造形活動の取り組みを紹介し合う場となっており、より幅の広い意味での情報交換の場となっている。また、奨励賞作品の選出作業を通して作品の見方や造形活動の在り方について研修を深める場はとても有効である。

2．各事業の成果

(1) 研究会への参加（7月27日）

第57回東北造形教育研究大会秋田大会・第39回秋田県造形教育研究大会秋田市大会に本荘由利の造形部員も多数参加した。県からの依頼により当日の準備にも携わることができた。

当日は、各会場に分かれて授業と分科会に参加し、新秋田県立美術館も会場となって盛大に開催された。また、にぎわい交流館AUも会場となり、建物のデザインにも触れる機会となった。講演は学習院女子大学より今橋理子教授の秋田蘭画についてのご講話を聞き、さらに深く学ぶことができた。数年前から準備していたこともあり、内容も濃く、有意義な研修となった。

(2) 本荘由利児童生徒美術展（11月20日～23日）

初めての由利本荘市文化交流館「カダーレ」での開催となった。開催期間は、予約の関係上3日間しかできなかったが、開催時間が午後８時までということと、最終日が勤労感謝の日であったこともあり、大盛況の内に終えることができた。「カダーレ」のギャラリー１・２・３を使った展示では、生徒児童の作品をゆったりと展示するスペースがあり、個性溢れる作品を存分に楽しんでもらえる展示内容になった。会員全員の協力があって無事に成功させることができた。

(3) 造形部研修会(12月7日)

由利本荘市市民交流学習センター多目的ホールにて県児童生徒美術展平面の部、本荘由利公開審査会として行った。本年度は昨年度と違う会場にての実施となったが，各校の協力によりスムーズに審査を進めることができた。また、作品の質も向上し、日頃の指導の成果が感じられた。

造形部員にとっては，児童･生徒の絵について話し合う有意義な研修の場となり，今後の授業に役立つ情報を得ることができた。

(4) 本荘由利小中学校の図工・美術の研究授業への参加

造形部研究部長より本荘由利の小中学校における年間の図工・美術の研究授業（要請訪問・教科等指定訪問）の一覧表が造形部員に配布される。

一覧表を見て造形部員が希望する授業を参観するようにしている。分科会の参加も可能な限りするようにしている。

大曲仙北造形教育研究会

会員数37名

組織　会　長　小　原　　靖（千屋小学校）
副会長　小　林　高太郎（桧木内中学校）　門　脇　伸　子（生保内中学校）
事務局　武　田　淳　子（大曲中学校）　田　中　真二朗（平和中学校）
高　橋　　涼（大曲南中学校）

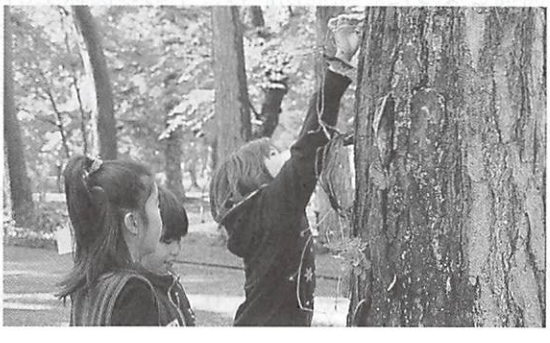
主な事業

○夏季研修会
「美術展鑑賞と研修」
～平山郁夫展を鑑賞～
期日：7月31日（火）
13：00～17：00
場所：秋田県近代美術館
内容：平山郁夫展鑑賞、意見交換

○平成24年度
大曲仙北造形教育研究会美郷大会
期日：10月26日（金）
場所：美郷町立千屋小学校

・研究授業①（2年）
「あつめて つないで くみあわせ」(造形遊び)
授業者：今野　俊　鈴木紀子　佐藤真紀
・研究授業②（5年）
「千屋の風になって」（造形遊び）
授業者：三浦里子　菅原　裕　髙橋正人
・提示授業①（1年）
「*Oh! Make Dream!!* 石にまほうをかけたら…」
授業者：後藤幸子　小原　靖
・提示授業②（3年）
「どんどんだんだんダンボール！」
授業者：東海林賢子　小原令子

今年度の研究大会は小学校の授業を中心とした研修となった。2年生、5年生共に自然豊かな校地内での授業となった。2年生は、様々な自然素材を組み合わせ、楽しい作品を数多く制作していた。



5年生は、同じく自然素材と関わりながら、自分好みの空間を意欲的に創っていた。どちらの学年も生き生きと目を輝かせて素材と関わる姿に感動を覚える一日となった。

また、2つの研究授業以外にも「提示授業」として1年・3年生の授業も参観させていただくことができた。会員も子どもたちと共に活動し、表現する喜びに改めて触れることができたと思う。

講演は岡強三先生を講師にテラコッタによる会員の実技研修を行った。参加の会員みんなが「ゆめ　ここに」をテーマに思い思いの作品を制作していた。作品は後日焼成して千屋小学校に展示した。

○第44回大曲仙北児童生徒美術展
11月9日（金）搬入・展示・審査
11月10日（土）・11日（日）児童生徒美術展
会　場：大仙市大曲交流センター講堂

	平面	立体	自由	合計
小学校	542	124	30	696
中学校	138	30	70	238
合計	680	154	100	934

ここ数年の傾向として，立体の部に題材や材料のバリエーションも豊富で楽しい作品が多くなってきた。自由部門で大作はもちろん，造形遊びの跡を感じさせる共同作品も見られてダイナミックで楽しい作品も見られた。

研究会の記録

今年度は千屋小学校を会場として、大変有意義な大会ができたと思う。子どもたちのパワーやエネルギーを改めて肌で感じることができた。今後も様々な研修の機会を通して、素材の良さや楽しさを発見し、大曲仙北造形教育研究会のテーマである「思い豊かで楽しくてたまらない造形教育」を求めて様々な活動に取り組んでいきたい。

横手市造形教育研究会

会員数26名

組織

会　長	木村芳孝	校長	（横手南小学校）
副会長	黒澤正尚	校長	（浅舞小学校）
事務局	佐藤朋子	教諭	（山内中学校）
会　計	高橋輝樹	教諭	（金沢中学校）
	草彌　昇	教諭	（十文字中学校）

主な事業

・つくってあそぼう（9月22日）
・A列研究会（11月2日）
・横手市児童生徒美術展展示作業・作品を見て語る会（12月8日）
・横手市児童生徒美術展撤去作業・秋田県児童生徒美術展への審査会（12月10日）

研究会等の記録

・「つくってあそぼう」は横手市教育委員会，横手市子ども会育成連合会が主催で行っている活動であり，横手市造形研も『図工あそび』コーナーを提供しています。今年度は，紙粘土でマグネット作りや，プラ版シートを使ってキーホルダー作りを行いました。

・A列研究会では横手明峰中学校教諭 高橋真理子先生から中学校2年生の授業を提示していただきました。小中合同の研究会のため，協議では小中合同の先生方でグループになり，話し合うことで小中の連携や研修の充実を図りました。授業を行うに当たって8月と10月に題材検討会や指導案検討会を行いました。

・横手市児童生徒美術展作業の後，今年度から『作品を見て語る会』を実施しました。小学校低学年・高学年・中学校の3部に分かれて作品の鑑賞を行いました。他校との情報交換や，題材研究の場となり，有意義な時間を過ごすことができました。美術展の会場を横手ワイワイプラザにして2年目になりますが，駅前ということもあり，作品が展示されている人たちだけでなく，多くの方々に作品を見ていただいたり，かまくらFMで中継していただいたりと地域とのつながりを深めることができました。

また，今年度から会場係を設けたことで，来場者の方へ作品についての説明を行うこともできました。

湯沢市雄勝郡造形教育研究会

会員数29名

組織

会　　長　芦原清巳（三関小学校）
副会長　佐藤義昭（田代小学校）　加藤久夫（皆瀬中学校）
事務局　三浦秀巳（三梨小学校）　長雄義明（羽後中学校）
　　井上晴子（川連小学校）
会　　計　三浦秀巳（三梨小学校）

主な事業

・郡市教育研究会総会：研究テーマ、活動計画、役員の決定　4／14	・第１回役員会：今年度の事業、並びに研修内容についての相談　6／8
・第57東北造形教育研究大会　秋田大会　参加　7／27	・第２回役員会：県美術展及び郡市地方展について　10／31
・県美術展審査、地方展開催、撤去　11／22～11／26	・第３回役員会：事業の反省、H25年度の計画、会誌「このゆびとまれ」製本２月

研究会の記録

◎秋田県児童生徒美術展湯沢雄勝地方展より

総出品数364点（小学校261点・中学校103点）うち108点を本郡市の優良作品として県に推薦した。

今年度の講評から

〈小学校・低学年〉

・動植物との関わり、生活科で体験したことをもとに、そこから空想を広げたり、自分の好きなものを描き入れたりして、場面を構成している絵が多い。

・楽しい思いを表現したものがほとんどであり、どれも子どもらしい作品に仕上がっている。

〈小学校・中学年〉

・３年生はのびのびと想像を広げて描いた作品が多く、４年生は空想画から写実的な絵画への移行が見られた。

・配色も明るく、楽しんで描いている様子が伝わってくる作品が多く見られた。

〈小学校・高学年〉

・透明水彩絵の具の特徴を生かして表現している。

・ものの特徴をとらえて緻密な描き方ができてきている。

〈中学校〉

・透視図法を生かした風景画では、技法の応用に加え、細部まで丁寧に描き込まれた作品が多く印象的だった。

・自分自身を複数の視点から見つめて描いた自画像など、表現方法に工夫が見られた。

・これまでの学習を生かし、画面構成や色彩表現と技法の組み合わせ方に３年生らしいこだわりが見られた。

第53回　秋田県児童生徒美術展

期　間：平成25年１月５日(土)～８日(火)
会　場：秋田県立美術館
　　４日間とも開館時間帯は、10：00～17：00

○主　催　秋田県教育研究会造形部会
　　秋田県造形教育研究会

○後　援　秋田県教育委員会　　秋田市教育委員会
　　秋田魁新報社　　ＮＨＫ秋田放送局
　　ＡＢＳ秋田放送　　ＡＫＴ秋田テレビ
　　ＡＡＢ秋田朝日放送

応募数	**平面の部**			
	出品総数	3,890点	入賞	1,223点
	推　賞	113点	話題作	38点
入場者数	2,995人			

平成24年度　第53回秋田県児童生徒美術展（平成25年１月５日～８日）

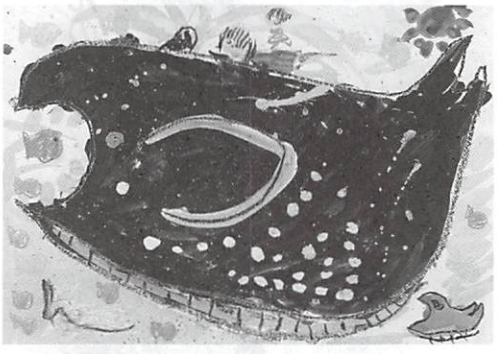
話題作一覧

（魁掲載）作品　～平面の部～

学年	題　　名	学校名	氏　　名	郡　　市
幼保	くじらがしおをふいたよ！	上宮第一幼稚園	中田香月	横手
	アコーディオンをひいてみたよ！	上宮第一幼稚園	塩田悠也	横手
小１	きじを見つけたよ	高清水小学校	三浦夏芽	秋田市
	わたりガニと、あそびたいな	花輪小学校	みかだ　あおい	鹿角
	ふしぎな木であそぼう！	笹子小学校	太田脩斗	本荘由利
	ぼくときりんとおともだち	追分小学校	なかいずみ　だいご	潟上南秋
小２	カプリンといろんな海の生きもの	六郷小学校	杉山こころ	大曲仙北
	どんどんのぼれ	川口小学校	こんの　みお	大館北秋
	牛の顔って、でっかいなあ	花輪北小学校	殿村翼	鹿角
	なんでもだませるまほうのこうもり	泉小学校	魚住ひさき	秋田市
小３	黄金の魚がつれるぞ	金岡小学校	北林唯愛	能代山本
	モチモチの木	鷹巣東小学校	日下部和	大館北秋
	夢のようなちょうちょうのお花畑	大住小学校	佐藤凜々花	秋田市
	行くぞ、シュートだ！	港北小学校	佐藤快政	秋田市
小４	リズムにのったバナナの皮	東成瀬小学校	鈴木望天	湯沢雄勝
	放課後のだれもいない教室	馬場目小学校	宮崎美博	潟上南秋
	木と光のカーニバル	十文字第一小学校	佐々木　あかり	横手
	木の時計で有名な小人と動物のホテル	秋大附属小学校	前田哲志	秋田市
小５	夢の国のおかしランド	種平小学校	加藤千穂	秋田市
	りんごがとれた・・・うれしすぎる！	平元小学校	豊田諒輝	鹿角
	うでずもうをしているぼく	金岡小学校	山田雅也	能代山本
	校舎	合川北小学校	沢藤満里萌	大館北秋
小６	池に映る手の心	川添小学校	長谷川律希	秋田市
	曲線の世界	太田東小学校	高橋健真	大曲仙北
	比立内神社	大阿仁小学校	鈴木孝明	大館北秋
	I Love School	西目小学校	齋藤泰樹	本荘由利
中１	海の世界	秋大附属中学校	加藤晟子	秋田市
	音のゆくえ	山王中学校	木村華	秋田市
	渡り廊下	東雲中学校	竹島いずみ	能代山本
	休憩中の光の間	大潟中学校	小野秀平	潟上南秋
中２	PASSION	増田中学校	佐々木理乃	横手
	春の道	東雲中学校	柴田好花	能代山本
	雨あがり	能代第二中学校	柳谷真央	能代山本
	森の実り	五城目第一中学校	館岡美紅	潟上南秋
中３	校舎裏の松	東雲中学校	大髙健太朗	能代山本
	世界は人であふれている	御所野学院中学校	庄司理瀬	秋田市
	三角と丸で囲まれた私の心	桜中学校	泉恵理	秋田市
	怒ったぞう！	秋大附属中学校	高橋蛍	秋田市

平面の部／話題になった作品

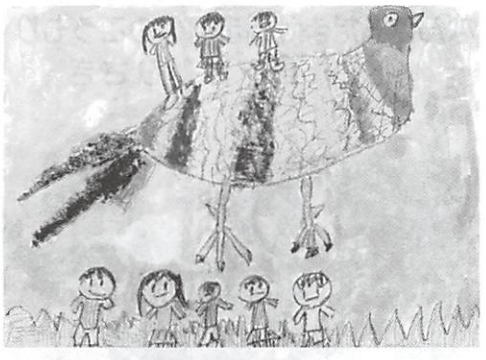
幼稚園・保育園



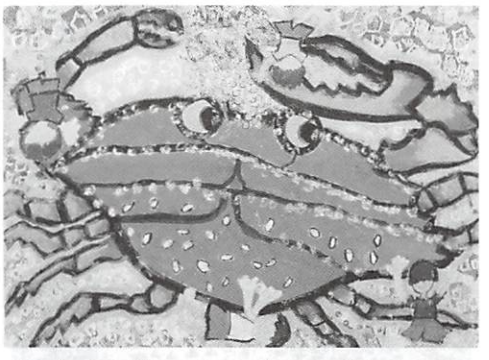
くじらがしおをふいたよ！
上宮第一幼稚園　中　田　香　月

アコーディオンをひいてみたよ！
上宮第一幼稚園　塩　田　悠　也

小学校作品

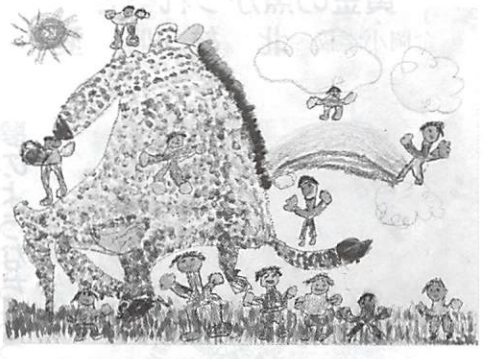


きじを見つけたよ
高清水小学校　三　浦　夏　芽

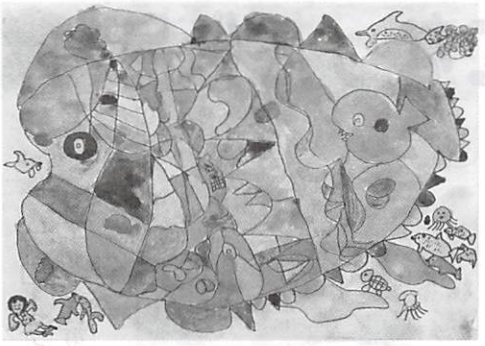


わたりガニと、あそびたいな
花輪小学校　みかだ　あおい

ふしぎな木であそぼう！
笹子小学校　太　田　脩　斗



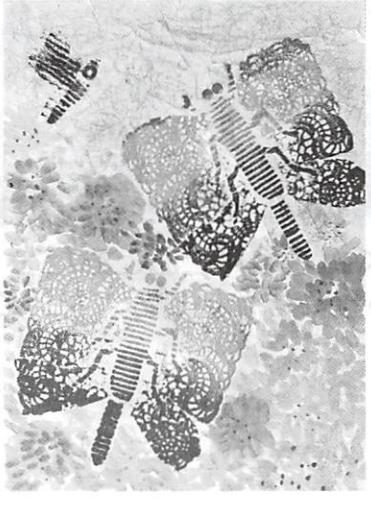
ぼくときりんとおともだち
追分小学校　なかいずみ　だいご



カプリンといろんな海の生きもの
六郷小学校　杉　山　こころ

牛の顔って、でっかいなあ
花輪北小学校　殿　村　　翼

黄金の魚がつれるぞ
金岡小学校　北　林　唯　愛



夢のようなちょうちょうのお花畑
大住小学校　佐　藤　凜々花

どんどんのぼれ
川口小学校　こんの　みお

なんでもだませるまほうのこうもり
泉小学校　魚　住　ひさき

モチモチの木
鷹巣東小学校　日下部　　和

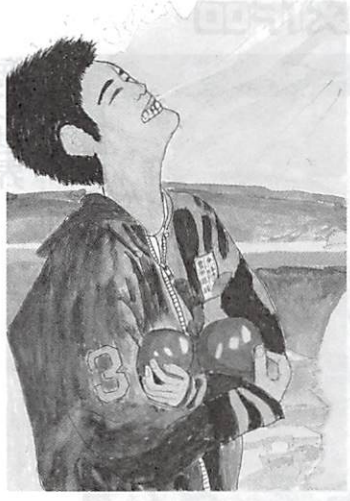
行くぞ、シュートだ！
港北小学校　佐　藤　快　政

放課後のだれもいない教室
馬場目小学校　宮　崎　美　博

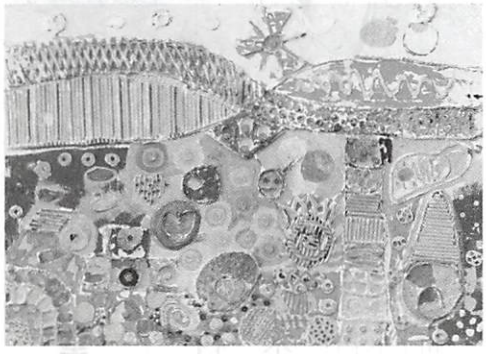
リズムにのったバナナの皮
東成瀬小学校　鈴　木　望　天

木の時計で有名な小人と動物のホテル
秋大附属小学校　前　田　哲　志

木と光のカーニバル
十文字第一小学校　佐々木　あかり



りんごがとれた・・・うれしすぎる！
平元小学校　豊　田　諒　輝

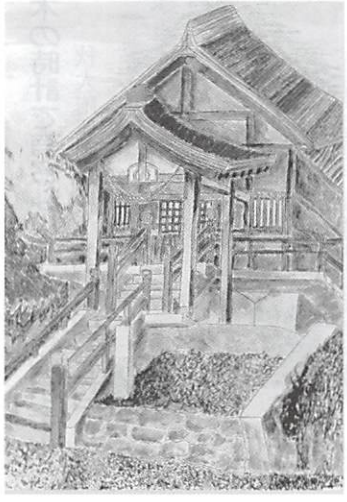


夢の国のおかしランド
種平小学校　加　藤　千　穂

校　舎
合川北小学校　沢　藤　満里萌

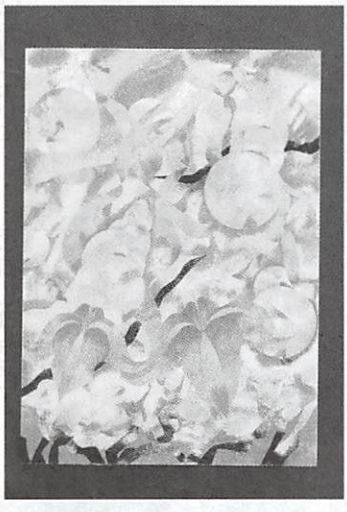
うでずもうをしているぼく
金岡小学校　山　田　雅　也

池に映る手の心
川添小学校　長谷川　律　希

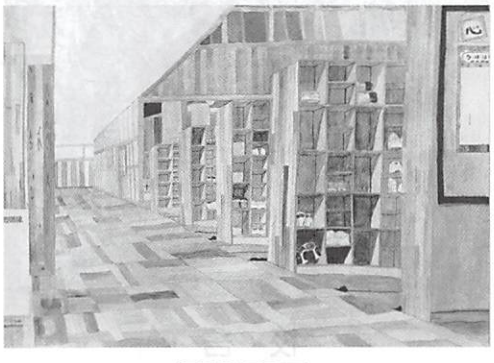


比立内神社
大阿仁小学校　鈴　木　孝　明

中学校作品

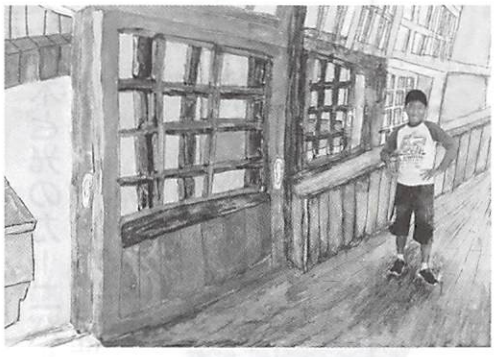


海の世界
秋大附属中学校　加　藤　晟　子



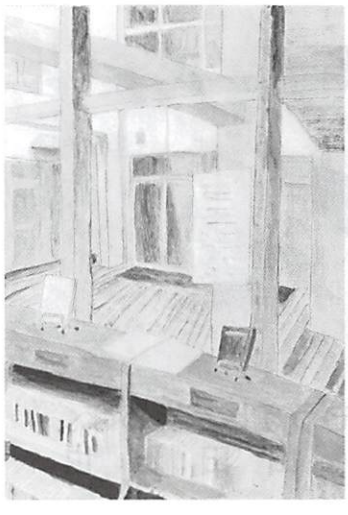
渡り廊下
東雲中学校　竹　島　いずみ

曲線の世界
太田東小学校　高　橋　健　真

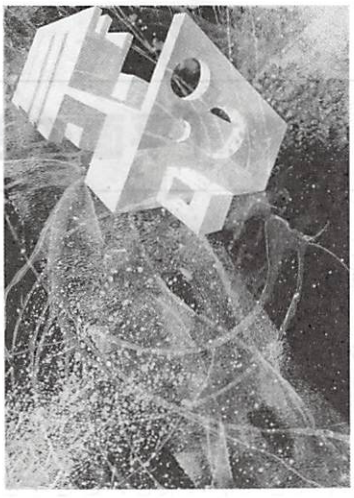


I Love School
西目小学校　齋　藤　泰　樹

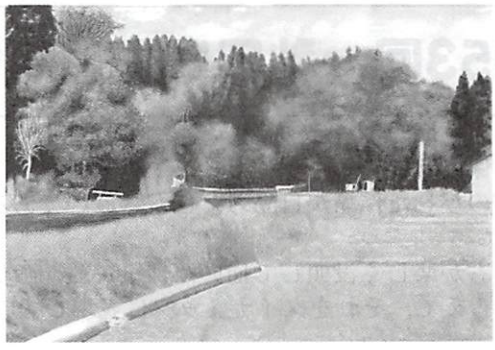
音のゆくえ
山王中学校　木　村　　華



休憩中の光の間
大潟中学校　小　野　秀　平



PASSION
増田中学校　佐々木　理　乃



春の道
東雲中学校　柴　田　好　花

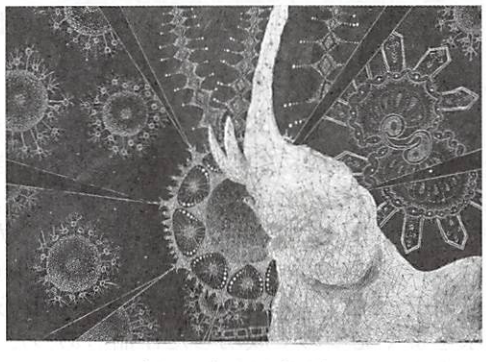
雨あがり
能代第二中学校　柳　谷　真　央

森の実り
五城目第一中学校　館　岡　美　紅

校舎裏の松
東雲中学校　大　髙　健太朗

世界は人であふれている
御所野学院中学校　庄　司　理　瀬

三角と丸で囲まれた私の心
桜中学校　泉　　恵　理



怒ったぞう！
秋大附属中学校　高　橋　　蛍

第53回　秋田県児童生徒美術展　総評「平面の部」

【幼・保の部】

のびのびした作品が目立ち，色もきれいである。色については，指導者の絵の具の与え方に工夫が見られた。

子どもが楽しく没頭して描いた様子が絵から伝わってきた。子どもの描く線には，まよいがなく，物の特徴をとらえて，それをダイナミックに表現している。自分の描きたいことをしっかり描いている。

【小学校低学年の部】

のびのびとした作品が多く，力作が多く見られた。色づかいなどを工夫しながら楽しいことをどんどん描きたしていったものが多い。身近なものを題材にして，それを自分なりの色で表現していて，自分のイメージした感じをよく表現していた。画面いっぱいに大胆に描いていて，目にとび込んでくるような作品があり，よかった。形にとらわれることなく，自分なりの形で描いていて，見る人に伝わってくるものがあった。物そのものをそのまま描くのではなく，その物と自分との関わりの楽しさをよく表現していた。

また，あわを作ってうつしたもの，ローラーを使って描いたもの，クレヨンをひっかいたもの等，様々な技法を使っていて，そこからうまれた偶然の形を生かして自分のものとしている。想像力をよくはたらかせた作品があり，よかった。

【小学校中学年の部】

色調が明るく，自分の思いをのびやかに表現している作品が多く見られた。また，描き手がモチーフから受けた神秘的な感じや恐れ，期待感などの様々な思いを構図や色づかいを工夫して表現しようとしている作品は，見る者をひきつけた。

題材としては，地域素材を活用したことにより，自分の思いをテーマにねり上げ，最後まで根気強く描いている作品があった。題材研究を十分に行ったことで，子どもたちが安心して自分のよさを出すことができたと考えられる。

主題を表現過程の中でも高めたり，構図や動きを工夫するためにも，様々な表現方法を積み重ねていくこと，そして，描く前に前年度の作品や教科書等の参考作品を十分に鑑賞させた上での対象との直接的なふれあいが大切である。また，この時期は，客観的思考力の発達段階から写実的な表現にも興味をもつ。この特性をふまえた指導を望みたい。

【小学校高学年の部】

描きたいという気持ちの伝わる，主題がはっきりした作品に心ひかれた。表現力が力強いもののみではなく，やわらかく表現しているものもよく，どの視点で工夫しているかがよく伝わる作品に話題が集まった。人の目をひく奇抜さも必要だが，そればかりではなく，自分なりの観察による発見を素直に表現した作品や前にせまってくる感じ等，描きたい思いが全面に出ている作品が素晴らしかった。

また，技法的に考えて表現しているものもあれば，偶然出てきたものを大切にして，それを生かして表現している作品も多く見られた。再現的技法も少なく，高学年らしい自分のこだわりや色彩の鮮明さが目立ったことも今回の特徴である。

技法的には，コラージュが多く見られたが，作品の一部として絵の具のように素材として使用している場合，効果があるが，一工夫必要なものも見られた。

背景の処理にも指導者の工夫が必要である。主題を生かす背景の処理について，いくつかの選択肢をもってアドバイスすることができれば，さらによい作品が生まれてくると思われる。

【中学校の部】

明確な自己テーマをもち，それを自分の中で深めて力強く訴えてくる作品が多く見られた。その際，これまでの授業で積み重ねてきた様々な技法を，自分のテーマを表現するためにどう使うかよく工夫されていた。具体的には，筆のタッチを活かした作品と，筆以外の道具を使った技法をうまく使っていた作品や，絵の具やペンを併用して成功している作品があった。

また，学校生活の中から気に入った場所やものなどの対象を選び，平常時の視点ではなく，角度を変えた時の切り取り方を工夫している作品，光をとらえようとしたり，クローズアップして切り取ったりしながら，対象をよく見つめて成功した作品もあった。一方で固有色にとらわれないで，自分の世界をつくり出そうとして成功している作品もあった。

研　究　の　記　録

第57回東北造形教育研究大会秋田大会を終えて

大会実行委員長
（秋田市造形教育研究会会長）
佐　藤　一　彦

大会主題「生きる輝き，つくりだす喜び～内面から湧き上がる造形活動を求めて～」のもと，７月２６，２７日の両日に開催いたしました第５７回東北造形教育研究大会秋田大会・第３９回秋田県造形教育研究大会秋田市大会に，東北各地より多数ご参会をいただき，盛会裡に終えることができましたことに，厚く御礼申し上げます。

実行委員会では，この度の大会計画にあたり，秋田の子どもたちの創意あふれる造形活動についてはもちろん，秋田県立美術館が新築移転し，新秋田県立美術館となり暫定オープンする絶好の機会を受け，秋田県の美術や美術館等についてもその魅力を大いに発信する機会としたいと考えて準備を進めてきました。全体会場は新県立美術館と同じ敷地（秋田市中通再開発地区「エリアなかいち」）にオープンする「にぎわい交流館ＡＵ」でぜひ開催したいと考えておりました。ところが昨年の大震災があり，平成２４年４月にオープンする予定でありました各施設工事の工期が遅れて計画通りの大会実施が危ぶまれ，大変憂慮いたしました。しかしながら何とか間に合い，７月２１日にオープンしたばかりの各施設で本大会を開催することができた次第です。被災され大変な状況の中参会してくださった先生方，ご多忙中にもかかわらずご参会いただきました皆様に，心から感謝申し上げます。

記念講演では，学習院女子大学教授 今橋理子 先生から秋田蘭画に関するご講演をいただきました。小田野直武をはじめ後生に残る文化遺産を生み出した人々の関わりを俗説にとらわれることなく科学的に解き明かしていく先生の論拠に思わず引きずり込まれました。秋田蘭画の新たな魅力を皆様と共有できたことを大変嬉しく思います。

公開授業は，大会主題のもと「身体感覚を揺り動かすような題材の構成」および「活動のよさや価値を感じ取れるような温かな評価」の２点を研究の重点とし，子どもが生き生きと造形活動に取り組む姿を思い描きながら，各研究グループが総力を挙げて事前授業研究会等を通して練り上げてきました。美術館等と連携し，郷土秋田が誇る美術を題材にした鑑賞教育の可能性も探ることもでき，私たちにとりまして，改めて教師の役割・支援や美術館等との連携の在り方を考えるよい機会となりました。さらに，実践発表をしていただきました幼稚園，特別支援学校，高等学校とも連携できましたことは大きな収穫でした。

各研究協議会では活発な議論が行われ，皆様の造形教育に対する熱意を感じました。子どもたちが図工美術を通じて生活や社会とかかわり合い，生活を楽しく豊かにできるように，造形活動の働きについてこれからも我々は研鑽を積んでいくことが求められることを，改めて確認したところです。

また，作品展示には特別支援学校の作品のほか，秋田市大森山動物園とも連携し，秋田市造形教育研究会が共催する大森山動物園「親子ふれあい写生大会」の過去約１０年分の受賞作品も展示することができました。

大会運営にあたりましては，参会者の皆様にご不便をおかけすることがないように努めてまいりましたが，会場分散型の大会運営は経験が乏しく行き届かない点も多々あったのではないかと思います。何卒ご容赦いただきますようお願い申し上げます。

最後になりましたが，本大会を開催させていただくにあたり，物心両面にわたるご指導とご支援をいただきました秋田県教育委員会，秋田市，秋田市教育委員会をはじめ後援をいただきました各関係機関の皆様，会場校の秋田大学教育文化学部附属小・中学校，また，熱心にご指導くださいました指導助言者の皆様に心から感謝を申し上げ，御礼のあいさつといたします。

第57回東北造形教育研究大会秋田大会
第39回秋田県造形教育研究大会秋田市大会

大会日程

◇　7月26日（木）

14:30	15:00	16:30	18:00	20:00
受付	東北造形教育連盟理事会（秋田キャッスルホテル）	休憩	情報交換会（懇親会）（秋田キャッスルホテル）	
	助言者・司会者・授業者・運営責任者打合せ（秋田県民会館分館 ジョイナス）			

◇　7月27日（金）

9:00	9:15	10:05	10:20	11:10	11:20	12:40	14:00	14:40	16:10	16:30
受付	公開授業A①（秋大附属小学校）	休憩	公開授業A②（秋大附属小学校）	休憩	研究協議A 研究協議B 研究協議E （秋大附属小学校）	昼食・移動	開会行事　講演　閉会行事 （秋田市にぎわい交流館AU 3F多目的ホール） 作品展示：（秋田市にぎわい交流館AU 2F展示ホール）			
	公開授業B①（秋大附属小学校）		公開授業B②（秋大附属小学校）		研究協議C※ （新秋田県立美術館）					
	公開授業C②（（現）県立美術館）		公開授業C①（赤れんが郷土館）		研究協議D 研究協議F 研究協議G （秋大附属中学校）					
	公開授業D①（秋大附属中学校）		公開授業D②（秋大附属中学校）							

※　研究協議C　11：40～13：00

公開授業

協議会	題材名（領域）	所属校・学年	授業者
A①	ながーい　ふわふわ　ぐ～るぐる（造形遊び）	秋田市立旭南小学校　1年	大野由加里
A②	入って入って　みーつけた！（造形遊び）	秋田市立大住小学校　3年	菊地有希子
B①	キラめいて　わっしょい（絵・立体・工作）	秋田市立港北小学校　4年	簗瀬　智美
B②	森のクリエイター（絵・立体・工作）	秋田市立勝平小学校　6年	岩野ひとみ
C①	あけてみよう　勝平得之のとびら（鑑賞）	秋田大学教育文化学部附属小学校4年	齋藤知佳子
C②	鑑賞「秋田の行事」（鑑賞）	秋田大学教育文化学部附属中学校2年	奈良　隆一
D①	はらぺこあおむし動物園に行く　～コラージュで絵本をつくろう～（絵やデザイン）	秋田市立外旭川中学校　2年	鎌田　政美
D②	風を感じて　～モビールをつくろう～（彫刻や工芸）	秋田市立御所野学院中学校　1年	小柳紀恵子

実践発表

協議会	発表題	所属校	発表者
E	ひろがる　ひろがる ～人・もの・こと　とのかかわりを通して～	秋田大学教育文化学部附属幼稚園	臼木　裕美
F	わたしとみんなをつなぐ色リレー ～新しい学びと創造の場としてのワークショップ型学習の実践～	秋田県立秋田きらり支援学校	大友　良江
G	語り合える彫刻　～夢に向かう「自分」の抽象表現～	秋田県立秋田高等学校	深井富美子

大会主題

生きる輝き，つくりだす喜び

～内面から湧きあがる造形活動を求めて～

1　大会主題について

私たちの生きる社会は，めまぐるしく変化する知識基盤社会，グローバル化，国際競争の中にありながら，異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性も求められている。子どもたちには，このような状況の中で「生きる力」を育てる重要性が増している。自分を取り巻く様々なものとのかかわりやつながりを強め，人間らしい見方や感じ方を育む造形教育は，豊かな情操を育て，生きる力を培う上で無くてはならないものである。一方，私たち教師が日常接する子どもの姿からは，人と異なる表現への自信，材料や用具に関する多様で豊富な体験，互いを知ろうとするコミュニケーション力といったものを身に付けさせる必要が強く感じられる。私たちは，造形活動でどのような子どもの姿を求めなければならないのだろうか。

一心に造形活動へ向かう子どもの姿からは，子どものもつ造形的な資質や能力が自然に発揮されていることが見て取れる。生き生きとつくる様子は，見て感じ取り，考え，工夫する力が働いていること，そして何よりも，自らつくりだす喜びを味わっていることを示している。自らの思いで表現する子どもの姿である。それは自己の存在を強く感じながら，新たな世界に向かう楽しさを味わうことでもある。そこには，その子どもの生きる輝きがある。

このような造形活動を進めるものは，内からあふれ出てくる表現への意欲であり，また，様々に感性を働かせて行われる造形活動そのものである。つくりたいという気持ちが，材料に触れ発想し形にしていく過程で膨らんでいく。心に情景を描いたり，材料の感触を味わったり，形や色を考えたりしながらつくる行為が，表現したいものを追究する意欲をさらに高め活動を進めていく。また，表現及び鑑賞の活動はもとより，作品，友人を始めとする他者や社会等とのかかわりなどからも，様々な感じ方や見方，表し方があることに気付き，改めて自分なりの表し方や考えを確かにしていく。このように主体的で内なる動機に基づく造形活動は，自分に向き合い，改めて自己の存在を確かめることとなる。これは，よりよいものを求め，よりよく生きようとする姿勢と通じるものであり，ひいては豊かな心や人間性を育むことへつながっていくものであろう。

このように子どもが自ら求め，内から動かされる造形活動の姿を求めたいと考えて，大会主題を「生きる輝き，つくりだす喜び～内面から湧きあがる造形活動を求めて～」とした。

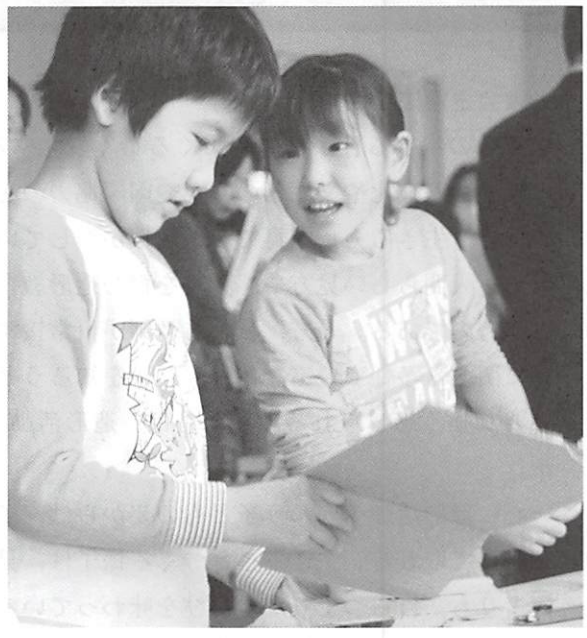
2　目指す子どもの姿

材料や人などとかかわる中で，つくる喜びを味わい，表現に没頭し深化・発展させながら表現したいもの（テーマ）に向かって造形活動しつづける子ども

3　研究の仮説

感動をよぶかかわりをつくりだすことで，よりよい表現を求めようとする意欲が高まり，子どもに豊かな情操を養うことができるのではないか。

子どもは自分を取り巻く様々な「人・もの・こと」とのかかわりの中にあり，周りから影響を受け，また，自らも与えながら，この中で造形活動を行っている。それは，題材，材料，技法といったものから，想像や空想，発想，意欲など思いや気持ちにかかわるもの，さらに，教師と子ども，子ども同士の日常的な関係や雰囲気など，人とのかかわりに関することも合わせて含んでいる。造形活動は本来個別のものであるが，他とかかわり交流する中で刺激を受け，改めて自分の表現として発展していく面をもつ。そのため，個の造形活動を高めていく上で他とのかかわりは大きな意味をもっている。個の受けた刺激やかかわりは意欲や感情へ働きかけ，そこから新たな表現が生み出されていく。子どもの心を揺さぶるかかわりであるほど，より強い追究の姿勢で造形活動がなされていくだろう。



造形活動のきっかけとなり，推進していく力ともなるこのかかわりを感動のあるものにする。こうすることで，子どもたちは試行錯誤しながら，よりよい表現を求める意欲を高めていくのではないだろうか。また，意欲を持続し創造的な表現を生み出すことのできる活動を展開させていくことを通し，子どもがそれぞれに自分のよさや造形を学ぶことの意味や価値を見つけられるようにしていく。このような，よりよいもの，美しいものを目指す主体的な態度を育てていく中から，豊かな情操を養うことができるのではないかと考えた。

4　研究の重点

感動をよぶかかわりをつくるために，次の２点を研究の重点としている。

(1)　身体感覚を揺り動かすような題材の構成

一時もじっとしていることができないような幼い子どもたちでさえ，一心不乱に絵を描いたり，手近なものを組み合わせたりする活動に没頭している姿を幼児教育の現場で見かけることがある。「表現意欲というのは一種の生命力で，思いのほかに激しいもの」[*1]であるからであろう。しかし，そこまで激しく湧きあがってきていた表現意欲が，徐々にしぼんでいき，なかなか描けない，作れない，アイデアを出せないという姿も年齢を重ねるにつれてしばしば見られることである。造形教育は，子どもの頃にもっていた体の奥底から突きあげてくるような描きたい，つくりたいという衝動が起こってくるような活動であるべきではないだろうか。子どもの表現意欲を激しく呼び戻すためには，どのような刺激を子どもたちに与えたらよいのだろうか。

普段我々が得る外界からの刺激は，そのほとんどが視角と聴覚から得られている。特に視覚からの情報が抜きん出ていることは，疑う余地がないことであろう。視覚があまりにも強烈なため，普段の生活において忘れられがちであるが，我々は身体全体を使って外界と接している。通常，あわせて五感と呼ばれている視覚，聴覚，味覚，嗅覚，狭義の触覚，これらが我々にとってなじみのある感覚である。従来の造形教育でも，これらを取り入れようという試みがなされており，実践もなされてきた。身体感覚とは，これら五感の全てを統合的にバランスをとっている感覚[*2]のことを指している。コモン・センスや共通感覚とも呼ばれ，ギリシャ哲学の頃から現代まで数多くの哲学者たちによって思索されてきた。またこれらのように人間が直接感じ取ることが可能な感覚の他に，いわゆる常識と呼ばれる知覚がある。常識は，時代により社会により文化により一定のレベルのものが作り出される。常識，すなわちコモン・センスは，共通感覚であるのだから身体感覚に他ならない。常識で社会を認識する際も，統合された感覚であり五感を貫き

統合する根源的な身体感覚で認識していることになる。すなわち，直接五感で感じとることのみならず，社会の中で生じる事象も含めて，身体感覚を用いて我々は世界を認識しているのである。
現代のような状況では，バーチャルな世界やネットの世界にどっぷりとつかるなど，視覚の優位性の中で希薄な人間関係しか築けないケースが問題となっている。このような状況では，従来の視覚に頼り切った認識からスタートした問題であるのだから行き詰まってしまう。重要なのは，五感をいかに組み換えて認識していくのかということである。もっといえば広義の触覚が共通感覚すなわち身体感覚の役割を担っている[*2]ことを考慮すると，触覚を回復あるいは復権させるような組み換えで，このような状況を打破することは可能になるだろう。
以上のことを造形活動に置きかえてみたい。子どもたちは，題材と出合い，材料と出合い，人と出会う。そして，身体感覚をフル活用し，それらを認識することで表現への思いを深めていく。材料や人とのかかわりを通じて，そこに新しい意味を見出すことで想像力を働かせて，ふさわしい方法を選択し，思いを形に表していくことで創造的な活動にしていく。そこで，より主体的で能動的なつくりたいという意欲を呼び起こすためには，身体感覚を揺さぶるような出合いが必要となるだろう。それは，視覚が優位的に働くような刺激の出合いではなく，触覚を主として組み換えられた身体感覚を揺さぶるようなものになすべきである。

【重点（1）を具現化するために】
①表現の多様性を引き出せるような題材を設定し，出合う場を工夫する。
②表現を深め，発想を広げられるような材料とともに，自己選択できる副材料や用具等を用意する。
③感じ取ったイメージを形にしていくことができるよう，試行錯誤できる場を保障する。

(2) 活動のよさや価値を感じ取れるような温かな評価

私たち教師は，子どもたちが，文字化された言葉や数字では言い尽くせない自分の内にあるものを手探りで表出しようとすること，イメージを現実のものにすることを支援する。
時には，素材のリアルさを手段として使いこなす子どもの姿を，時には，美術作品から感じたことを発表する子どもの姿を，彼らが手探りで達した内なるものとして捉える。教師は，真摯で温かい心をもちながら，必要な支援の手を差し伸べる。そして，行きつ戻りつ試行錯誤しながら没頭する子どもたちの姿を追い続け評価をし，その一方で称賛や承認，期待を込めて後押しするのである。私たちは，教師の役割をそのように考える。[*3・4]
子どもたちの作品は，その過程において，言葉にならない対話[*5]を繰り返している。並べ，積み上げ，色を選び，重ねながら，二人三人と寄り合い，批評する。時には遊び，時には認め，時にはよさを真似る。様々な試行を何度も繰り返した後に，接着したり，画面に描いたり，造形したりする。そこに至るまで，子どもたちは他者を認め，よいものを取捨選択して自分の内に取り入れ新たな可能性を広げ変化させていく。その過程でのつぶやきや対話は，変化した様子とともに，子どもを見取る手立てとなる。名簿や座席表，デジカメやビデオなどの映像は，教師の確かな見取りを補助するものとして，有効に活用したい。
製作途中の作品を棚に収めるとき，子どもたちは倒れないように前後左右を注意し慎重に大切に動かす。この様子も，一つの評価場面である。それは，一単位時間の終末に振り返りとして発言する言葉をしのぐ自己評価の姿と見ることができる。
「学習カード」の中で発する言葉とともに，子どもたちが時間をかけて積み重ね，滲み出す何かを受け止めたい。時折見せる満足そうな表情や仕草は，自信をもち一人歩きできる原動力となる。それは，白黒の決着をつけることのできない微妙で繊細な曖昧な事実にあふれた現実[*4]を「生きる力」なのである。学習

過程の中で，表れては消え，また表出してくる子どもたちの作品とともに形成的評価をしていくことは，子どもと共にねらいに迫り次の一歩へと成長を促す。学習活動の中で，子どもたちの心に寄り添い，受け止め，手を差し伸べることを，私たちは「温かい評価」と捉え，造形教育の本来の営みであると確信する。

教師の発する一言一言が心に響く。それ以上に子ども同士の「いいね。」の声が意欲の高揚につながる。他者評価が契機となるときだ。また，子どもが，自分の表現に「手ごたえ」を感じ，夢中になり心を開放し身体ごと満足感に浸るとき．子ども自身が「自己指導の主人公」*5となる。自己評価の成立である。言い換えれば，子どもの表現が深まりイメージを広げた瞬間，思考・判断・表現を身につけたときなのである。そこで得た表現方法，技法は，子どもの内なるものとして確実に芽吹き，次の過程へさらなる一歩を踏み出す。これが「生きる力」を身に付けた子どもであり，「自立」と言える。

教師あるいは友達という他者である評価者は，その後変化することのない完結した物－「完成品」だけを対象とはしない。子どもの揺れ動く製作過程でこそ，評価し声をかけることが不可欠である。子どもの意図や努力など関心・意欲・態度の形成に大きく影響する点を援助し見取っていく機会を見極め，逃さずに設定することも教育的役割である。

次の目的，学習活動の過程を経て，一人一人を評価し見取っていくことが，思考・判断・表現を身につけた子どもたちを育むことになる。ゆるやかに，しかし確実な見取りが，五感を使い自己表出した子どもたちの創造的な造形活動を支える。自己開放し自信を得た子どもたちこそが，知識基盤社会の一員を担うことになる。私たちは，そんな願いを本研究の中で考えてきた。

【重点（２）を具現化するために】

①子どもの活動を見取り，支えていくために，対話を通して意図的，計画的に賞賛や助言などをする。

②子どもの活動を見取るために，座席表や映像記録，学習カードなどを活用する。

③互いの作品や活動を認め合うことのできる場を適時設定する。

本大会では小・中学校の公開授業後，幼稚園・特別支援学校・高等学校も含めて７つの協議会がもたれます。授業での子どもの姿や実践発表をもとに，各部会のテーマに迫るものになっているか，協議，検証，忌憚のないご助言をしていただき，造形教育活動を改善し造形教育の意義をさらに高めていけることを期待しています。

＊１『今日の芸術』岡本太郎著　光文社

＊２『共通感覚論』中村雄二郎著　岩波書店

＊３『美術教育と子どもの知的発達』エリオット・アイスナー　仲瀬律久訳　黎明書房

＊４　平成２２年改訂指導要録準拠『新しい学習評価のポイントと実践１～３』ぎょうせい

＊５　教職研修総合特集『教師の言葉とコミュニケーション
教室の言葉から授業の質を高めるために』秋田喜代美編集　教育開発研究所

A：小学校造形遊び

●協議会テーマ

**心を解放し，イメージを広げ
楽しむ造形遊び**

1　授業者から

「ながーい ふわふわ ぐ～るぐる」

旭南小１年：大野由加里先生

材料を何にするか悩んだが，身近でシンプルなもので体全体を使って活動させたいと考え，肌触りがよく扱いやすいトイレットペーパーを選んだ。

できるだけ早く活動に入らせようと思い，導入は５分くらいにした。材料とじっくりかかわる時間を取り，後半ですずらんテープ，脚立，色つきのティッシュを加える予定だった。本時は，緊張したのか最初は子どもたちが硬かったので早め早めに材料を加えた。最後にはみんな夢中で活動に浸っていた。

振り返りの場面でデジカメを使ったのは，①形に残らない変わっていくものの変化を撮るため，②教師の評価の見取りのため，③子どもが自分や友だちの活動を思い出して振り返るためである。

モニターで見せると子どもは自分の活動や形のよさに気付く。また，教師の話を加えることでさらによさに気付く。ビデオ撮影も合わせて行っている。

「入って，入って，みーつけた！」

大住小３年：菊地有希子先生

造形遊びをすると，子どもたちは気持ちが豊かになるように思う。友だちのよいところを探すようになり，学級経営上とてもよいと感じる。

事前に何回か造形遊びをした。段ボールに切り込みを入れて組み立てるという造形遊びでは小振りなものが多かった。今回は，中に自分が入るということで，大がかりなイメージをもたせることができたと思う。

当初は洗濯ばさみ，すずらんテープなど色の付いたものも材料にしたり，外階段や廊下など活動場所を広げてみたりした。子どもたちは楽しんでいたが広がりすぎてまとまらなかった。材料を限定することで形や組み合わせ方，何をどう表すかに集中させてみた。イメージを広げるために，材料や机の置き方を工夫した。

遊び方やルールの工夫で盛り上がったことや，これまでの活動とは違って他のグループとつながらなかったことが意外だった。

2　研究協議（話題になったことを中心に）

(1)　授業展開や支援について

・先生の言葉掛けが大切だと思った。言葉かけの計画はあるのか。

→子どもの活動を価値付けすることが大切だと考えている。スピーディな活動では，簡単な言葉でその場で本人に分かるようにほめることにしている。今後蓄積されることを願っている。

→グループ活動なので「○○さんに聞いてみよう。」と，他の子どもと関わるように声を掛けている。作品の変化について声をかけた。

・幼小との連携で見せていただいた。費用をかけることはできないので新聞紙を材料にしている。色やテープ，脚立など工夫がいっぱいで，掘り下げていけば無理なくできると思った。

・材料の見せ方や教師の仕草がよく，引きつけられた。いつも，せっかくつくったものがゴミになっていたが，再利用の方法があると気付かされた。活動の途中を撮影しておくと振り返りに使えると分かった。

・何をどのくらい与えるか悩む。途中から色の付いた材料を入れた意図を教えてほしい。

→白だけにしようか悩み色を調べた結果，青とピンクが使いやすそうだった。子どもに驚きやわくわくを与えたかった。色付きの

ティッシュペーパーを追加することで色を意識し，活動が活性化するのではないかと考えた。

(2) 鑑賞・振り返りについて

・鑑賞について，自分の気付きを表現する手立てはどうしているか。

→造形遊びで生まれた言葉を日常生活で積み重ねていけばよいのではないか。教師は何と言い表しているかに気を付けさせている。

→図工の振り返りカードを継続して書いている。時々子どもに読ませて，自分の成長を振り返らせている。教師の書いた返事を楽しみにしているようだ。

・子どもは活動中も他の活動を見ているものだ。他の班を紹介するなど発表の場面をつくっている。

3 指導助言

仙北市立生保内中教頭：門脇伸子先生

たくさんのトイレットペーパーでダイナミックな活動だった。肌触りがよい材料が感動を呼び，身体感覚に働きかけるものだった。途中ですずらんテープ，脚立が加わることで平面的だったのが立体に広がった。

マニュアルはないので，後出しが必ずよいわけではない。子どもの様子やどういう気分になるか予想しながらそれぞれの授業で考えなければならない。

デジカメはすぐ振り返られるので有効だった。掲示として活用したり，プリントして子どもに渡したり，図工ノートに貼って次の作品への資料として使うこともできる。ただ，カメラ越しだけにならないように時には広く見ることも大切だ。

一番大事なのは子どもの目線で活動して気持ちをキャッチすることだが，教師も一緒に遊んでいてよかった。

適切な言葉かけによって，子どもは自分では気付かないよさや，偶然であってもできたことを次に意識させることができる。それが自分の力として充填されていく。

造形遊びは，低学年では見守り励ますようにすること，高学年では視点を与えることが大切だ。子どもから考えを引き出し，子どもたちの思いをキャッチして肯定的に結びつけたい。中高学年ではあまりやられていないが，造形感覚などいろいろな感覚を身に付けるので大事にしてほしい。

仙北市立桧木内小校長：小林高太郎先生

造形遊びにおける教師の役割とは，素材と子どもをつなぐ，子ども同士をつなぐことだ。

子どもたちは元気にダイナミックに取り組んでいた。適切な指導が見られた。

概念的なものの発達があるので，「ルール」が発生するのは当然だが，アンチ概念を意識する必要がある。子どもが，自分がもったイメージに執着するのを壊す手助けを教師はできないだろうか。変わってもいいんだと安心させたい。変化や意外性が次の活動の意欲につながる。人が集まって活動することのおもしろみや，どんどん変わってもいいところに子どもの資質を高める要素がある活動だ。学年が上がるにつれて造形遊び離れがあるのは残念だ。

振り返りとはなんだろうか。どんな事に留意してやるのか。学習を定着し進化させ次への意欲をもたせる振り返りがある。また，子どものよさが認められることで，子ども同士の関係性を良好にしたり集団作りができる。その場合，よさを高めることを振り返りに盛り込むべきだろう。

この題材は概念的になってしまいがちだ。骨組みの安全性などは，やらせてみて失敗から学ばせると必然性のある学びになる。

造形活動の最後をどうするか，思いのあった活動だから活動の足跡を大切にしてほしい。お別れセレモニーなどをすることで，人がものをつくることを大切にする心情ができ次に挑む心が生まれる。

B：小学校表現

●協議会テーマ

「人・もの・こと」とのかかわりを通して喜び，高め合う表現

1　授業者から

「キラめいて　わっしょい！」

港北小４年：簗瀬智美先生

秋田市土崎には地元の祭りに「港曳山祭り」がある。２ヶ月前からたいこ，踊りの練習など，小学校でも祭りの練習をしている。子どもと地域，子どもと教師，子どもと子どもなどいろいろなかかわりがあるが「子どもと地域」が一番強いと思われる。

祭りのイメージとして，子どもたちから花火，提灯，曳山，曳山を引く動作等色々たくさんあげられた。今日はあかりを自分の祭りのイメージに近づけるように指導した。お試しコーナーの暗室では子ども同士のやりとりがたくさんあったと思う。自然にほめ合い，自然にアドバイスし合っていた。

光ではなく，あかりという言葉は子どもから出にくい言葉と思われたが，そこは子どもたちから出てきた。光を上から当てたり下から当てたりつるしたりしてみて，形ができると暗室に行き，試しながら自分だけのあかりをつくろうとしていた。試行錯誤する・追求するという点で子どもたちの成長を感じた。

「森のクリエイター

～板・木片・枝を組み合わせて～」

勝平小６年：岩野ひとみ先生

目標の中の「自分のテーマを明らかにすること」「製作の順序を考えること」を大事にして指導を心がけた。

５年生で木材を扱い電動のこぎりの使い方を学習している。高学年になってきて自分は何を表したいか迷う子どもや，どうつくってよいか分からない子どもが増えてきた。この題材では，発想や構想の苦手な子どものためにパズルのように遊びながらイメージを広げることができるようにした。材料となる枝や板・木片は，観桜会を行った際に拾い集めたり，各自で集めたりした。さらに学年便りで呼びかけたり地域の材木屋さんの協力を得たりした。

今日は子ども同士の言語活動を取り入れ，作業内容や順序は自己決定し，製作の過程では試行錯誤しながら自分のテーマを追求できるようにした。授業の始めに取り上げた写真は「隣の友だちからのアドバイスを生かしてつくっている子ども」「形にこだわっている子ども」「図工の苦手意識の強い子ども」の三人を選んで紹介した。友だちの作品を鑑賞して表したいことをより一層工夫できるように，ペアによる話し合いのポイントを示し，本時の自分の活動を再確認するようにした。さらに，自分の感じたことを用具や技法を工夫して表すことができるように働きかけた。

2　研究協議（話題になったことを中心に）

(1)　イメージの引き出し方について

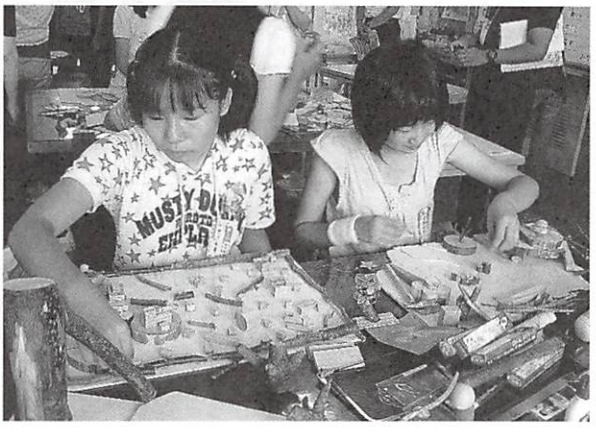
・４年　地域の祭りは子どもたちにとって身近なもの。朝の会のスピーチで祭りの思い出のスピーチをさせたり，国語の時間には言葉とイラストで学習シートにまとめさせたりした。また，製作に入る前の段階で光を使って遊ばせる体験をさせ，イメージマップづくりをした。

・６年　材料との出会わせ方の工夫をした。木を集め，まず木を切ってみる。並べる，崩すを繰り返し，何ができそうかと考え，木材と遊び，充分に楽しむ時間を設けた。発想が広がらない子どもに対して形に触れて話をしたり，見るもののテーマを与え環境を整えたりしてきた。

(2) 人・もの・こととのつながりについて

・４年　地域の祭りや伝統工芸など地域のものを使った題材は，つながりのスタートとして大変よい。授業が終わった後も地域に戻るので，子どもたちの情操教育としてもよいと思われる。

・６年　材料を通して，「建具屋さんのおじいちゃんの家に行く」「母と森へ行く」「地域の材木屋さんへ行き，木のことを聞く」など，人とのつながりができた。材木屋さんからは木を大切にすることや森を大事にしてほしいとの話があった。また，道具をうまく使いたいという思いから創造的技能の向上が見られた。



3　指導助言

大館市立雪沢小校長　：永井孝久先生

地元の祭りを題材にしたことでふるさとを愛し誇りに思う気持ちを育てるため，具体的に発展させた価値ある実践であった。祭りを想起しながら興味関心，夢や願い，想像力を働かせ自然にダイナミックさが出てきていた。祭りのイメージをあかりとして表現するのは４年生では難しいと感じていたが，「キラッとタイム」「お試しコーナー」の場の設定がよかったので，子どもたちはのびのびと楽しそうに製作できていた。お試しコーナーの暗室の中での子どもたち同士のかかわりは大変によかった。暗室が広いスペースを確保していたのがよい。あかりを特別視するのではなく，光をつけて感じる美しさ，反射など映し出される造形美についても，これから鑑賞会をするときに気付かせる工夫をしてほしい。「きらめいてわっしょい」という題材名では分かりにくいので，サブタイトルとして「～自分だけのあかりをつくろう～」と付けてもよかった。自分なりのイメージやテーマをもって表現するには，造形遊び的な要素が大事である。

秋田大学教育文化学部准教授：長瀬達也先生

「森のクリエイター」ということで，木に愛着や思いをもつための仕掛けを授業の始めに充分に時間を設定しているのが大変よかった。自分の中の森のイメージを人工の木と自然物とを組み合わせる方法をとり，具象的なところから抽象的な美しさへと導き，形の配置の美しさを追求させたことが素晴らしい。純粋に木材だけ与えられても子どもたちはすぐには立体作品の発想も製作もできない。ベニヤ板の上に木片をのせていくという「スタート」と「フィールド」が決められていることで，操作しやすい環境を整えたアイディアがよかった。ある程度制限を加えた方が表現を最大限に楽しめる。筆で描いたのでは決してできないよさがでた。ベニヤ板を一枚下に置くだけで教師も子どもも全体を見ることができるようになり森のイメージを工夫して表現しやすくなる。また板を持つことで移動や保管がしやすくなる。こうした工夫も授業づくりには大切である。導入で先生が子どもと作品の写真を見て発問する場面があったが大変よかった。発問が大事。導入で主題やテーマが子どもたちの言葉から生まれていたのでよかった。

C：小学校鑑賞

●協議会テーマ

作者の心を感じ取り
感動を広げ合う鑑賞

1　授業者から

「あけてみよう　勝平得之のとびら」

秋大附属小：齋藤知佳子先生

子どもたちが，作者の心を感じ取るために，次の３つの場面を設定した。

①一言お芝居

②絵パズル

③豆知識コーナー

①～③を楽しみながら体験することにより，得之の心を感じることができるのではないかと考えた。本時の授業で子どもたちは積極的に絵を選び，友達とのやりとりの中で自分の考えを表現することができた。課題としては，一つの絵に集中し過ぎて，他の作品に行けなかった子どもがほとんどで，勝平得之のアトリエコーナーにも行けなかった。

また，子どもたちが本時において感動を広げ合っていけるように，授業者が「よく感じることができたね，どこから見たの？」などと，グループの中に入って声をかけ，色や形の中から根拠を求めるように促し，評価を行った。子どもたちは「はじめ『戦い』と思っていたけれど，優しい表情から，手に持った物を他の人に渡そうとしていることが分かった。」「かまくらの中の子どもは『お手伝いをさせられている』と思っていたが，『みんなでお祭りを盛り上げようとしている』と考えるようになった。」など，話し合いの後の気付きの変化を発表していた。課題としては，もっと広いスペースで動けるとよかったと思う。実物の前で表現したり，展示室から研修室へ戻って表現したりするなどの手立てが考えられた。

2　研究協議（話題になったことを中心に）

(1)　作品選びについて

・３つの作品を選んだ理由は何か。

→得之の「四大祭り」の中の３点を取り上げた。「松明」の作品は子どもにグロテスクにとらえられるのではと思ったが，動的な物と静的な物を組み合わせたかった。絵の中の音にも目を向けるような感性を育てたかった。

(2)　絵をよく見るための工夫について

・作者の心を感じ取るためには絵をよく見ることが必要だ。よく見るための工夫とは何か。初めはテンションが高く「お芝居やろう」と言っていた子どもも，声かけによってじっくり見るようになった。鑑賞シートがよく見るきっかけとなった。鑑賞と表現を巧みにつないでいた。

→お芝居や交流だけで終わらせたくなかったので，絵の紹介の時間を取った。自分の感じ方，内面を探ることを大切にしたかった。

(3)　美術館との連携について

・子どもたちは感じ取ったことを話し合い，気付きの違いを語ることができた。美術館との連携がどの程度進んでいるか聞きたい。

→赤れんが郷土館には造形研出身の先生もいるので連携しやすかった。美術館側からは，授業等でどんどん美術館を使ってほしいという要望があった。勝平得之は秋田市大町出身の作家である。子どもたちはこの近くのねぶり流し館に，昨年，総合的な学習で訪れている。つながりができて，協力体制ができた。美術館で作品を見てほしいという願いは，授業者も美術館のスタッフも同じである。

・子どもたちが郷土作家の作品を見ながら一言お芝居をする姿に感心した。子どもたちの気持ちや，感じ取ったことを表現することが大切だ。絵を見ることの楽しさ，大切さを感じた。

・「なまはげ」という３分割した作品について，「左から右に時間が流れている。」という子どもの意見があった。絵と向き合うことにより，子どもの瑞々しい感性が出てくると感じた。

3　指導助言

秋田県立近代美術館学芸主事：田村稔先生

「作者の心を感じ取り，感動を広げ合う鑑賞」のテーマに沿った授業だった。その場での評価がポイントではないか。

鑑賞の授業が表現の授業につながることが大切である。この授業では「次は版画を学習する」という授業者の言葉が，子どもたちの意欲につながっていた場面だった。

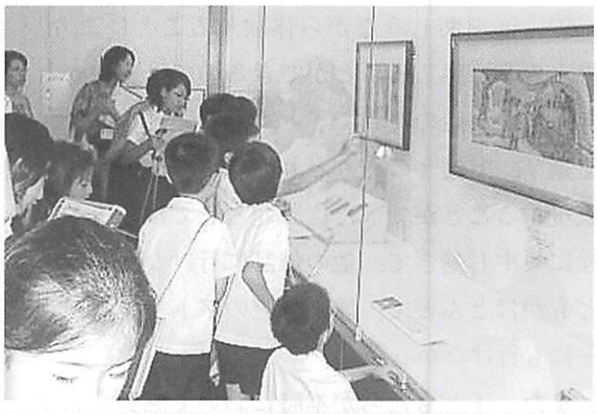
子どもたちが作品と出会う前に気持ちを盛り上げていた。その時間が20分もあったのは長かった。作品と向き合っている時間が15分だったので，その時間をもっと長くすればよかった。

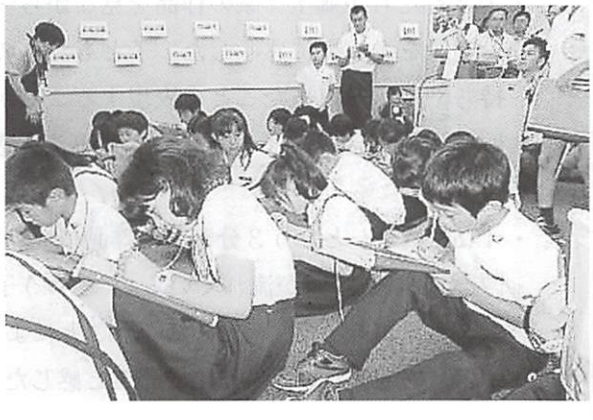
カードでまとめる方法で大切なことは，カードに書かれたことを具現化しなければならないということだ。

著作権に配慮がなされていた。鑑賞の仕方も，よく指導されていた。

鑑賞と表現のつながりについて，４年生ではこれから木版画の授業があるということだが，子どもたちが木版画の学習によく取り組むためには，勝平得之の作品以外の道具などのコーナーも見せてほしかった。

子どもたちはよく発言することができていた。指導者の手立てと授業の組み立てが子どもたちに合っていた。これからも美術館をより活用してほしい。





C：中学校鑑賞

●協議会テーマ

作者の心を感じ取り，感動を広げ合う鑑賞

1　授業者から

「鑑賞『秋田の行事』～美術館で実物の作品から作者の心を感じ取り感動を広げ合う～」

秋大附属中：奈良隆一先生

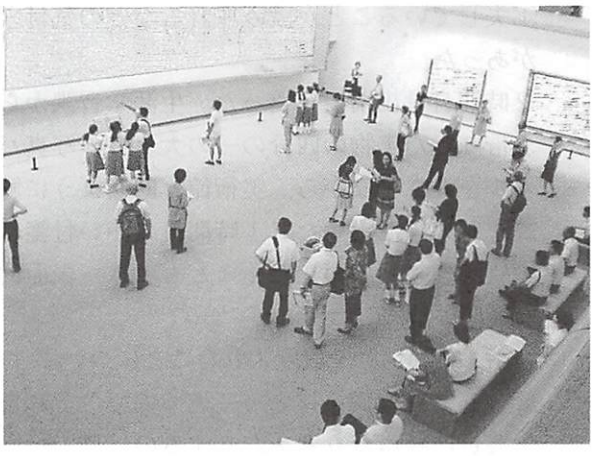
実物（「秋田の行事」藤田嗣治作）を見せることで感動の質を高めたかった。そのために二つの工夫をした。一つは実物を観る前に図版を使って学習を進めたこと。もう一つは現県立美術館の広い空間を存分に使って授業を行ったことである。

図版を使って２時間学習を行ったことについては，今日の授業の振り返りシートに次のような気付きが多数あり，成果があったと感じている。

・躍動感が図版よりも強く感じられた。
・迫力があり実物に勝るものはないと感じた。
・図版では分からなかったが実物では空の色の変化を発見した。
・出前授業を思い出して改めて作者のすごさを感じた。
・付箋を貼って勉強したときの疑問を確かめるように観ることができてよかった。

美術館の広い空間を利用して，個々に「絵を観るためのお気に入りの場所」を決め，場所が近い生徒同士で学び合う活動を取り入れた。近い場所で観たときの印象に惹かれた生徒と，遠くで観た全体の印象に惹かれた生徒に分かれた。また，２階（絵が展示してある階）と３階の印象の違いに着目する生徒もいた。学び合いを通して，一人一人の絵に対する感じ方が違うという感想をもった生徒が多かった。

美術館との連携については，何度も打ち合わせをして美術館側にも配慮していただいた。しかし，一般客もいる中での指導については，声の大きさなど難しい面もあった。そこで，出前授業を取り入れた。学芸主事の方に中学校に来ていただき，生徒の疑問を解決していただいた。絵の大型パネルを観た際の生徒の質問は，何が描かれているかという表面的な質問が多かったが，出前授業で疑問を解決できたことで，本時の授業では内面的な発言が多く出たと思う。



課題は，作者の心情や情熱に迫る話し合いをさせたかったのだが，それについての発言が少なかったことである。また，模写に挑戦する生徒がいないことも残念だった。模写する生徒がいなかった理由としては，ギャラリーの多さに驚いてかなり緊張していたことがあげられる。

「秋田の行事」を鑑賞授業に選んだ理由は，大きな絵なので小さな図版と違う学習ができると考えたことと，中学校から徒歩20分の近い距離にあるにもかかわらず，生徒のほとんどが美術館に足を運んだことがなかったので，この機会に見せたいと思ったからである。

2　研究協議（話題になったことを中心に）

(1)　美術館で鑑賞する前の授業について

・１時間目の前半は，「秋田の行事」のコピーを観ながら考えた。赤と青の付箋紙を準備し，赤い付箋紙には疑問に思ったことを，青い付箋紙には感想を書いてコピー作品に貼っていった。描いた年代や描かれている物についての表面的な疑問が多かった。後半は，カラーで印刷したワークシートを使った。赤い絵の具を使ったところだけ赤ペンで着色して裏返したところ，シートの裏に赤い色が写った。それを見て，絵の左右では赤の分量に違いがあり，赤い部分を引き立てるために空の色を工夫していることが読み取れるなどの気付きがあった。

・２時間目は出前授業だった。生涯学習課からお借りした実物の四分の一の大きさの写真パネルを鑑賞しながら，美術館と同じように解説をしていただいた。１時間目の赤い付箋紙の質問に答えていただくこともでき，表面的な疑問は解決した。

(2)　話し合い活動を取り入れたことについて

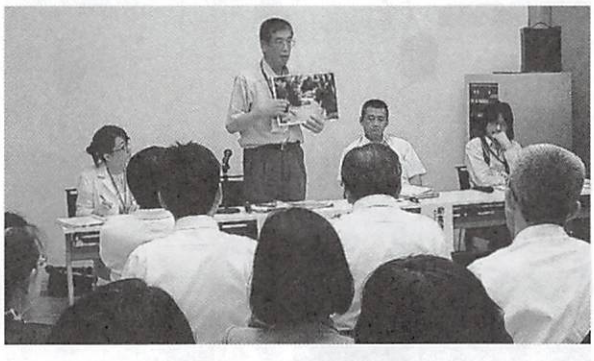
・絵の感じ方は個々によって違うので，それを学芸員に尋ねたり考えたりするのは個で行うものではないか。

→言語活動の充実という点で，話し合い活動を取り入れた。本物を前にしなければできない意見交換もある。気付きが生まれるための意見交換は必要である。

(3)　作者の心を感じ取ることについて

・本時の目標が「作者の心情や意図を感じ取り」とあるが，作者の心情とは何だろう。そこまで深く藤田の心を考えるのは難しいのではないか。

・美術館の構造に藤田は助言を与えている。入り口から絵が全て見える工夫や，作品が見やすいように湾曲している点などである。



3　指導助言

秋田県立近代美術館学芸主事：山本丈志先生

授業を通してまず感じたことは，授業者が日頃から生徒と良好な関係を築いていることだ。綿密な授業計画を立てており，至るところにアイデアを盛り込んでいる。教師としてこのような姿勢や取り組み方はとても大事であると思う。

この題材で特におもしろいのは，図版を使って授業を行い，最後に実物を鑑賞した点である。生徒はゲーム感覚で楽しみながら授業に臨むことができ，自分で疑問を設定して自分で解決していくことができた。通常，長い時間一つの作品を見続けていると飽きてしまうものだが，アプローチが多彩だったため飽きることがなく鑑賞できた。

美術館の職員として，秋田市の中心に住んでいる中学生が美術館を初めて訪れたという事実を聞いてとてもショックを受けた。これをこのまま黙認してはいけない。保護者の認識もさることながら，もっと美術教師が働きかける必要があると思う。これは鑑賞教育の大きな問題点だ。

美術館と学校現場との連携については，どちらかが重い腰を上げなければならない。美術館はハードルが高いと思っている美術教師が多いと思うが，美術館はそのハードルを下げたいと思っている。美術館側も展覧会の案内を出してそれで終わりではなく，問題点を改善していくよう努力する必要がある。

しかし，美術館側が改善しようとしても，例えば生徒が授業で鑑賞するとなると一般客が迷惑だと思う場合がある。そういう点では，一般客の美術館に対する考え方を変える必要もある。

今回の授業では，ギャラリーの我々が生徒にとって邪魔な存在だったのではないか。私たちが生徒と作品の距離を遠くしてしまったのではないか。生徒が鑑賞しているときは邪魔にならないところにいたほうがよかったかもしれない。

「作品の展示方法」については，照明が作品の上部に当たっており，近くで観ようとすると反射して見えづらい。したがって３階で観るか離れて観るしかない。その点を理解した上で授業者は授業を行った方がよかったと思う。

D：中学校表現

●協議会テーマ

感動を呼ぶかかわりの中から生まれる表現

1　授業者から

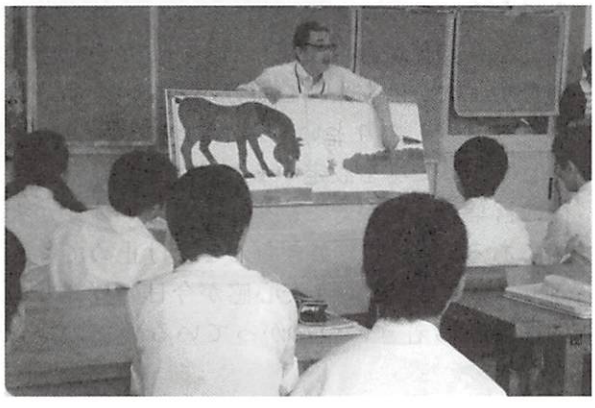
「はらぺこあおむし動物園へ行く
～絵本の１ページをつくろう～」

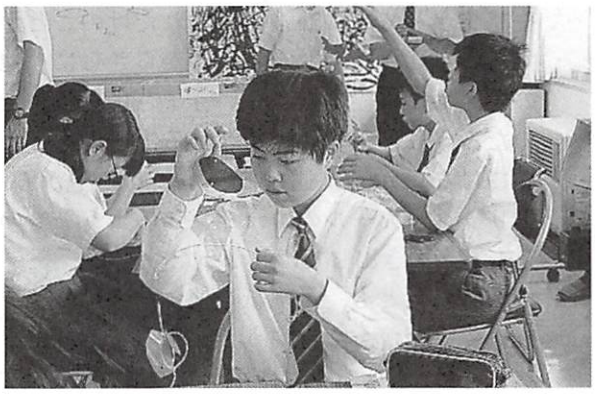
外旭川中：鎌田政美先生

今回の題材は，対象とする学年を変えたり，手直しをしたりしながら７年ほど前から実践している。絵本を使った題材が何かできないかと思っていたところ，エリック・カールの絵本では，以前の絵本のキャラクターを登場させているのを見たことがヒントになった。一貫して導入時には読み聞かせを行っている。大きい本を使うことで生徒が絵本の世界に入り込みやすくなり効果的であると感じている。生徒を題材の世界に引き込み，制作意欲を喚起するためには導入がたいへん重要であると考え，今回はあえて１時間目の授業を提示した。

絵本との出会いは，強烈な感動体験というほどではないかもしれないが，内面から湧き上がるほんわりした感動が生徒の「描いてみたい」「やってみたい」という気持ちにつながるのではないかと考えている。授業の最後に班内でアドバイスをし合う時間を設けたが，生徒自身がほんわりした優しい気分で作品をつくっているせいか，相手に対しても温かみのある優しい表現でアドバイスをする姿が見られた。

反省点としては，参考作品をもっと効果的に提示できればよかったことが挙げられる。例えば，黒板に貼るのではなく各机に回すなどすれば，もっと間近で作品を見て新たな発見があったのではないか。





「風を感じて　～モビールをつくろう～」

御所野学院中：小柳紀恵子先生

これまでの授業で「感じたことを表現する」をテーマに五感への働きかけをしてきた。例えば「“季節”には色や形や匂いはあるか」ということで色面構成を行ったり，色の名前に注目したりなどしながら，日々の暮らしの中で見たこと感じたことをどう表現したらよいかを考えさせている。ベランダに出て，目を閉じて風を感じ，ドローイングで表現するという経験もさせた。今回，モビールを制作するにあたっては，“風”のつく言葉を挙げてみたり，今まで自分が経験した風にまつわる思い出を思い起こしながら，それぞれに自分が表したい風のイメージをもたせるようにした。

今回使用した素材は，自分のテーマに合わせて「こんな材料を使ってみたい」ということで生徒がいろいろ持ち寄った。身近にあるものを利用してみようと呼びかけたところ，自分で持ってきたファイルを「この色がきれいだから使いたい」と切り抜いた生徒もいた。クリアフォルダーは各社様々な色のものが販売されており，手触りや材質感などから多くの生徒が気に入って使っていたようだ。

本時は，今まで制作してきた部品を，バランスや重さを考えながら繋ぎ合わせて吊していく活動であった。“風”というテーマとかかわりながら作品を完成させていくことはもちろんだが，それ以上に生徒には「素材とのかかわり」を大切にしてほしいと考えている。例えば貝殻を使うときには，穴をあける場所によって，堅くてなかなかあかなかったり割れてしまったり様々な苦労があるが，そのような抵抗感を味わうことで得るものは大きいと考えている。

2　研究協議（話題になったことを中心に）

(1)　付箋紙を使った意見交換について

・教師が絵本を読み聞かせたときの生徒の反応

や感想がとてもよかった。これだけのことができる生徒なのだから，そこからさらに「他の生徒はこの絵本のどういうよさに気付いたのだろう」と話し合いを深める方法があったのではないか。友達とのかかわりの中から，エリック・カールのエッセンスのようなものをもっと引き出してほしかった。

・授業者二人とも，付箋紙を使った感想交換を行っていたが，そういう方法を取った理由を教えてほしい。話し合いや発表などある程度生徒に語らせてから書かせる方法もあったのではないか。

→（鎌田）生徒は，褒められるのが好きである。友達から温かい言葉で褒められたりアドバイスをもらうことが以後の制作に生きる。グループで交換したり必ず一人一枚もらえるようにするなどもう少し工夫できたかもしれない。時間が足りなかったのと生徒の緊張している様子からこのような形をとった。

（小柳）短時間で温かい交流と相互評価ができる。自分の思いを書く，伝える，という活動は「今日，活動したぞ」という満足感が得られ，話すことが苦手な生徒も，そういうことで他の生徒とかかわり合うことができる。

・付箋紙を使った感想交換は，生徒同士の認め合いにはいいが，そこで終わってしまわないようにしたい。「すごい」「いいね」だけでなく，例えば今回「色が統一されていていいね」といった造形要素に触れた感想があったので，それを取り上げて深めていきたいものだ。

(2) 生徒同士のかかわり合いの工夫

・青森市では付箋を使った意見交換はよく行われている。大勢の意見をまとめるのに便利であり，同じ意見を集めて貼り替えて編集もできる。

・小さいホワイトボードを各班に渡して書かせて黒板に貼る，というのもよく行われている。

(3) 意見交換をする際の内容について

・生徒同士の関係を考え，「よいところを書きなさい」と指導してきた。しかし「ここはこうすればもっとよくなるはずだ」という意見は，書く方ももらう方もさらに勉強になるのではないか。中３国語教科書に「批評文を書く」という学習があり，３年生がその学習をした後に「“批判”ではなく“批評”を書いてほしい」と説明したところ，よい鑑賞会ができた。

・アドバイスをもらうことがゴールではなく，そこからまた学習を深めていくことが課題ではないか。

3 指導助言

秋田市教育委員会指導主事：松田清悦先生

今回の授業は「エリック・カールのような作品をつくらせる」ことがねらいではない。この学習を通して教師が生徒に何を伝えどのような資質を養おうとしているのかを考えて参観しなければならない。

アイディアスケッチができていないため，アドバイスし合う活動の盛り上がりに欠けた。アイディアスケッチの時間が足りなくて残念である。読み聞かせが丁寧すぎたのではないか。

「感動」とはどういうことかと考えたとき，「体験を共有する爽快感」「人の生き様から学ぶ感動」「自然の偉大さや未知のものとの遭遇」「音楽・美術など感性的なこと」など様々ある。鎌田先生の授業では，スポーツのような動的な感動ではなく，ほのぼのとした，心を揺さぶらせるかかわりが随所に見られた。自分の発想や表現が認められた嬉しさや幼い頃の自分との邂逅，今まで感じなかったことを感じる心の動きを大切にしていた。

今回の題材は，絵本の中の「ぼくの友達になって」の一言から発想を広げさせていた。美術の授業について日頃から考えていないとできないことではないか。

三種町立山本中校長：佐々木彰子先生

２人の授業に共通するのは，生徒の落ち着いた学習態度である。なぜそうなのかと考察してみた。

安藤忠雄の言葉に「不安と隣り合わせの自由な時間と場所。一人でやってみろ，という緊張感。そんな場面の中での体験そのものがその人間を一人の自立した人間として強くさせる」といった内容のものがある。今日の授業を受けた彼らがこれからどんな力をつけていくのか楽しみである。

子ども自身が自らに課したハードルを越えられたかどうかは本人にしか分からないため，書いたり発表したりといった活動が必要となる。そして，単に場を設定するだけでなく，その生徒の言葉や思いがそこに生かされているかが大切である。「先生方がきちんと受け止めてくれる」「大丈夫」という安心感が今日の授業での生徒の落ち着きにつながっているのではないか。

E：幼稚園実践発表

●協議会テーマ

「人・もの・こと」とのかかわり，自分の思いを自分なりに表現する充実感を味わう生活

1　発表者から

秋大附属幼：臼木裕美先生

はじめに，本園の教育目標を「心豊かで創造的な子どもの育成」とし，遊びの中で主体的に環境と関わりながら育つ過程を大切にしながら，一人一人の遊びの時間を充実させるよう援助している。主体的な遊びの経験は，生きる力の基礎を培うと考えている。子どもたちは「人・もの・こと」とかかわりながら，感じたことや考えたことを自分なりに表現しようとし，その過程でつくりたい思いやイメージが広がり，様々な経験や感情体験が広がって，結果として豊かな感性や表現を楽しむ気持ちが育つのではないか，と考える。

お祭りごっこをすることになった中で，ある園児がねぶた祭りを見てきた経験から，ねぶたをつくることになった。園児たちはお互いにやっていることを見たり，楽しさを感じたりしながら，思い入れが徐々に深まっていったようである。お互いがお互いのあこがれとなるようなかかわりが，遊びが充実する中で生まれていった。

2　研究協議（話題になったことを中心に）

・幼稚園教育要領改訂の要点は，表現に至る過程を大事にしてほしい，子どもたちの心が動いたポイントを大事にしてほしいということである。教師の投げかけがうまくいくこともあるし，ズレがあることもある。先生の温かな支援がうまくいっていた。

・冷蔵庫の空きダンボール箱の大きさには納得したが，直方体からは発想が難しいようであった。A児が目を付けて新しい使い方を発見したからこそ，B児も新しい価値を見いだせたのだと思う。

・五歳児がねぶたに感動したというのが嬉しい。ねぶたの映像や写真があったらもっとよかったのでは？中学校でもねぶたのものをつくって，クラスの絆を深めたりすることもある。

3　指導助言

聖園学園短期大学准教授：小笠原京子先生

ねぶたの勇壮さや迫力に圧倒されたB児の感動を，もっと聞き出し，イメージを掘り起こせばよかったのではないか。小さなダンボールを組み合わせたら大きくなり，それ自体がねぶたの凹凸を表現できる。光を表現するには，ペットボトルにセロファンを入れる。黒い画用紙の上から何かを貼ると，夜らしくなる。ものとのかかわらせ方が子どもに任せきりではなく，こんなのもあるよ，という提案や誘いかけがあってもよかった。A児はねぶたを見たことがないが，B児はA児らが始めたことが楽しそうに見え，なんだか楽しそうという見通しがもてた。みんなでやっているうちに，なんとなくみんなで楽しめるものになっていった。それぞれの思いの表現が否定されないで，なんとなくつじつまが合っていった。動く，引っ張って遊べるということに，子どもの愛着が集まっていった。ものをつくるには共通のイメージづくりが必要だ。感動や直接体験はイメージづくりの手助けをする。

造形教育のねらいは，感じ取る感覚を育てることである。すべての教育の土台には感性の教育がないといけない。現代は視覚に偏っているが，たっぷりと自然に触れさせることが大事である。五感を研ぎ澄ませ，感覚を広げてつないでいくことが大切だ。

たっぷり時間をとって，場所，ものを準備し子どものやりたい思いを尊重している附属幼稚園の取り組みがすばらしい。はさみの使い方を十分にやらせているなど，子どもに段階を踏ませながらいろいろな経験をさせている。子どもは見立てが上手で感心する。楽しい経験が子どもの自信や意欲につながっていけるよう，これからも導いていってほしい。

F：特別支援学校実践発表

●協議会テーマ

子どもたちの「やる気」「思いやり」「個性」を引き出すワークショップ型授業の在り方

1　発表者から

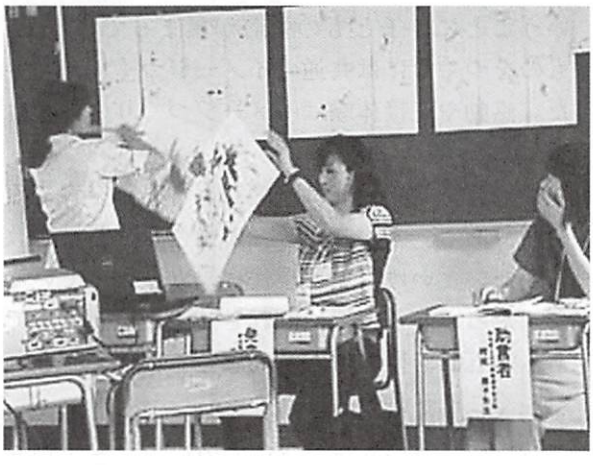
秋田きらり支援学校：大友良江先生

現在は肢体不自由児の学校に勤務している。ワークショップ型の授業に行き着いた背景や，実際の生徒の作品を紹介しながら授業実践についてお話していく。平成８年から聾学校に11年間勤務し，美術，印刷デザインなどの授業をもった。平成19年から勝平養護学校，平成22年から秋田きらり支援学校で勤務している。肢体不自由児の学校は６年目である。

今日は，さっそくワークショップを，参加者の皆さんでやってみたい。

〔ワークショップ「色リレー」の実際〕

・Ｂ５版の画用紙に１ｃｍ四方の四角を描き，ウラ面に名前を書く。
・前の人が書いた四角の色からインスピレーションして，前の四角に接するようにまた四角を描く。（５～８人のグループで，右隣に回す。）
・そうやってどんどん回していき，全員で紙をリレーして初めに自分が四角を描いた紙が回ってきたら終了。



〔参加者の感想〕

・自分のところに作品が帰ってきた時がうれしかった。
・もう１～２周したらもっと楽しいかも。
・斜めの模様の色リレーが楽しい。
・さいころの展開図のようになったら楽しいと想像した。
・いろいろな人の違う模様が楽しい。
・シンプルな模様にまとまって，安心した。
・回ってくる模様によって次に描きたくなる模様も違うと感じた。
・最初は遠慮した。１ｃｍ四方の大きさが人によって感じ方が違う。
・自分だけでは考え付かない模様や規則性があった。
・みんな違ってみんないい。
・このワークショップは，最後にどうなるか分からないところが楽しい。
・他の人の描いた物をもっとよくしようという思いやりがあった。

〔ワークショップについて〕

もともとワークショップは現場で共同作業するという意味である。現在では，一方的な知識や技術の伝達ではなく，参加者が体験をとおして相互作業の中で学ぶ，トレーニング方法や創作するスタイルを指す。美術の分野では，芸術の創作過程をとおして芸術家と参加者が双方向で創作を行うことや，キュレーターとともに作品と体験的に関わり表現やコミュニケーションを学習していくものを言う。例として，「越後妻有アートトリエンナーレ大地の芸術祭2009」，酒井浩一さんの『ＬＩＦＥworks＋ みどりの部屋プロジェクト』などがある。酒井さんは歴史的建造物などをフロッタージュする作家である。たとえば，人が自由にその集落の木の葉をフロッタージュし，壁に貼り付ける。そのようにして一人ひとりが写した葉っぱで部屋が森になり成長していくという作品がある。「瀬戸内国際芸術祭2010」での地中美術館やその他の作品を例に挙げた。現代アートは地域や人をつなぎ，作者の深い思想の中で取り巻く世界そのものを表現している。

〔わたしの実践〕

美術の学習は個性を追求し心を奥深く掘り下げていく行為であり，生徒たちには，自分らしい表現を追求することが大事だと伝えてきた。そのためには，高度な技能や知識，画面に向かう忍耐力が要求され，技術を体得し困難を乗り越えた時，楽しさや喜びを感じることができると聾学校で教えてきたが，肢体不自由学校の勝平養護学校ではこれまでやってきたことが役に立たなかった。どのように意欲的に向かわせたらよいか悩んだ。

ＩＣＩＤＨの考え方から，ＩＣＦの考え方へ障害児教育が変わっていったことで，自分の創

作活動や美術の授業も考え方が変わった。自分らしい表現を追求し，作品を完成させる自己表現ではなく，その子を取り巻くすべての環境に突き動かされて造形活動に向かっている環境表現とでも言うべきものが大事であると感じた。作品を仕上げるのが目的ではなく，造形活動の過程そのものを大事にしていくようになった。

私が考えるワークショップ型の学習とは，現代美術の動向やICFの理念を背景に，子供が何を感じ，または感じでほしいかといった造形活動そのものを授業のねらいにし，生徒の体調や心，一人ひとりにあった道具，その生徒の個性が生きる創作筋道，意欲がもてる教材といった環境を整える，そして，教師は創作する生徒を取り巻く環境の一部であるといったことである。

「色リレー」の生徒作品では，１ｃｍ四方のルールをやぶる生徒，障害特性から四角が描けず点々で表した生徒，全体に散らばった点々に接するようにして四角を描いた生徒などが見られた。「もっと描きたい」「ここに別の絵を描きたい」など生徒たちの発想は自由である。「色リレー」を生かして「写生をする」ときは，背景を塗るとか構図を決めるとかではなく，どこから描くのでもよく，絵がはみ出てしまうのでもよい。「学校の調理室」，黄色い花を見て描いたのに「黒い花」，「校舎」などを描いた生徒もいれば周りの友達が描く自由さに影響される生徒もいた。天地がなく，抽象的な作品になってもよい。「色リレー」をやった結果，友達の良さに気付くきっかけになった。

2　研究協議（話題になったことを中心に）

・生徒の自由な発想の作品を見た人たちは「もっときちんとつくらせないのか」と言う。そんな時はどんな風にしたらよいか。面の塗り方はどうでもよいのか？と言われたりする。

→自分の中で「こういう風にしたい」という目的があれば，こだわらなくてもよいと思う。

→自分が受けた美術教育が基本になっていると思う。子どもがぎゅっと握った粘土が作品になる。何かの気持ちをこめて握ったならば，それは作品として認めてあげたい。

→反射は造形ではない。成長や気付きがないと表現とは言えないだろう。造形活動を初めてやったときと，やった後では違った，それが美術教育ではないか。

→「よい作品」ではなくとも，やはり過程を大事にしたい。

→作品づくりよりも，過程を楽しませたい。旭南小学校の大野先生のトイレットペーパーを使った授業のように，友達とふれあうところは大事。さらに表現活動が広がるのではと感じた。

・中学校から高等部に入った生徒は，忠実に描きたがるが，周りの生徒に影響されていい意味で崩れてきた。しかし，別のグループで活動したときにはまた，忠実な堅い絵を描くようになってしまった。

・来年から小中一貫になる。美術の時間だけではなく，子どもの見方（ＩＣＦの考え）について早速広めていきたい。

3　指導助言

秋田県立近代美術館学芸主事：樫尾康子先生

〔評価について〕

教師も環境因子の一つだ，というところから，教師の「いいね～」など子どもを褒めるつぶやきを聞くと，子どもは喜ぶし，さらに発想が広がる。他の子にもよい影響がある。どんなところがいいのかどんどん子どもに伝えてほしい。

〔教師も環境の一つ〕

教師も成長し続ける，環境の一つであればよい。新しい美術館ができたら行ってみるなど，様々なところを見に行って表現の仕方を自分の中に取り込んでほしい。他に目を向ける勉強をしてほしい。「こんな表現の仕方もあるんだ」といったことがわかる。例えば，特文連の美術展の作品の中に泥遊びしたようなものもある。教師とのやりとりの中で右に手を動かすなど，活動の過程に成長があればよいのである。教師はその次の展開を考えてどんどん広げていく。

〔教師への宿題〕

ここで思うのは，特別支援学校の12年間の教育をこまぎれに授業しないで縦につないでいってほしいということである。同じことをやり続ける子ども（例えば丸い粘土を作り続ける）がいたら，どうするか。変わらない強さをもっていると捉えることもできる。しかし，それをどう発展・成長させていくか。もし，展示する時に同じような作品があったら，どちらを選ぶか。子どものどんなところをみていくか。先生たちへの宿題としたい。

自分の受けた美術教育だけが規範だといつまでも変わらない。たくさんの価値を吸収していってほしい。

G：高等学校実践発表

●協議会テーマ

高校における題材設定の必然性
～伸ばす，深める，気付く～

1　発表者から

秋田高校：深井富美子先生

教師は，生徒にどんな力を身に付けさせたいか考慮した上で，題材設定をしなければならない。時には教師も生徒も倦厭しがちな題材を，教師が克服していく必要がある。どれだけ，生徒の心にしみこむ内容にするかが重要なのである。

今回の題材で獲得できる力として①石を彫るという困難の克服を通して，乗り越える力②削る効果を通して予測する力③他人が考えない事をしてみることで工夫する力④用具の使い方を通して応用する力，を身に付けさせられるということがこの題材の「必然性」であると考えた。また，修学旅行で訪れた先で見た仏像を，生徒たちは意外に素通りしており，自由行動でもなかなか寺院や仏像を巡りたいという生徒が少ない。日本の美術の歴史や表現の特質，美術文化について理解を深めることは，日本人として大切だと考える。今まであまり関心をもたなかった彫刻のおもしろさや多様な表現方法を知り，これらを意識して鑑賞するようになるきっかけとしたい。これもまた，この授業の「必然性」である。

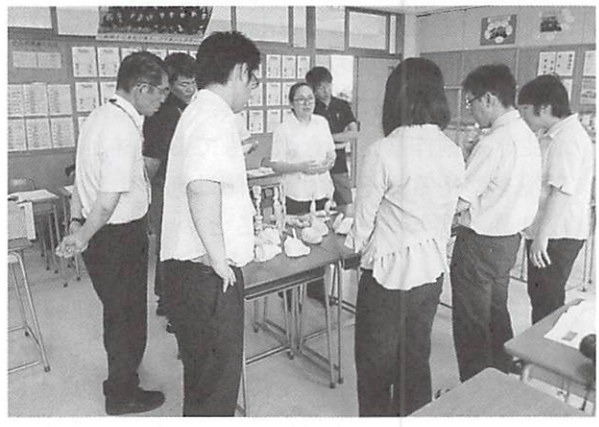
今回の題材のポイントとなるのが「抽象」という言葉をどのように理解を深めさせるかである。はじめに「抽象」に対する個々の意見を書かせ，後にクラスの意見をまとめさせた。語り合う事によって，理解を深められるようにした。また，今回はイメージづくりの手立てとして「坂の上の雲」（司馬遼太郎）を用いることにした。理由は，抽象作品を「雲」に例えることで，形を追いやすくなると考えたからだ。また，資料を配付した際，クラスがどよめくほど反応が大きく，周囲からの期待を感じている生徒たちの置かれた状況と重なり，大変適していたと感じている。

今回の実践の成果として，生徒は仕上がりに期待感を抱きながら生き生きと取り組む事ができ，絵画的なものの見方だけでなく，三次元的なものの見方や多面的にものを見ようとする力がついた。教師としては生徒との一体感を得られたのが大きな成果であった。また，彫刻への興味関心を実感できる場をどうつくるか，専門性を追求したいと感じた生徒への対応などの課題も見えてきた。

美術Ⅰの２単位の中では必然性を意識した題材設定が重要となる。美術教師は様々な分野を生徒に味わわせ，社会に出てよりよく生きるための力を育てなくてはならないと考えている。

2　鑑賞会

協議会に入る前に，生徒の作品を実際に鑑賞し授業者への質問を行った。話題の中心になったのが，「数学の授業で空間認識に関する問題を扱わなくなってきており，アイディアスケッチなどの平面表現からそれを立体表現へ変換させるときに非常に苦労している」ということであった。それに対し，授業者の高校では，数学科から逆に空間認識が甘いので，美術でやってもらえないかと依頼があり，透明の立方体に球体が入ったときの面積の求め方など，模型を活用し教科間で協力し，同時進行して進めることができたとの回答があった。



3　協議会（話題になったことを中心に）

鑑賞した生徒の作品へは付箋が貼られ，３色に分けられていた。その色分けの理由を探ることが協議会の中心となった。授業者から答えは以下のものであった。

①石の元の形を生かしてそこから抽象的な形を見付けるように声かけをした生徒の作品

②授業時間が少なく，とにかく作業を進めようと声をかけ，生徒の主体性に任せたクラスの作品。

③絵の好きな生徒であり，石の模様を追うように彫っていった作品

授業者の声かけのありようで，生徒の作品の出来が変わってくることの証明であり，授業内での教師の発言の影響力を痛感させられた。

4　指導助言

秋田大学教育文化学部教授：笠原幸生先生

はじめに，この実践をバルサ材で行いたいと言われたが，「本当に自分がやったのだ」と後から思えて，触ってやり遂げたという達成感が得られるのは石である。また，ほとんどの生徒が初めての経験であり，制作過程で生徒が，周りと比べて上手い下手の差を感じないこともよかった。テーマの設定もよく，自分の理想とする「雲」を石の中に探しなさいというのはすごく勉強になった。彫刻では，自分の思う形を力ずくでつくるという方法もあるが，元にあるもの（石の形）を生かすつくり方は，石の魅力を引き出している。

１年次に美術Ⅰのみの履修という，限られた時間数の中で，３分の１を立体に費やすのは大変だが，非常に意義がある。

第57回東北造形教育研究大会秋田大会
第39回秋田県造形教育研究大会秋田市大会

記念講演

「直武・百穂・狩野亨吉—秋田蘭画をめぐる知の共同体」

講師：学習院女子大学　教授　今橋　理子氏

［はじめに］

お話を始める前に，最初に告白してしまうのですが，私は十代の頃美術の教師になりたい夢をもっていて，私なりにそちらの方に進みたいと検討していた時期もありました。しかし，自分の才能に限界を感じ，早くに見限った方がいいだろうと思いまして，大学に入学してから美術史という道を見つけ歩んで参りました。

秋田蘭画とは，たまたま出会ったというのが実は正直なところで，私自身は生まれも育ちも東京。秋田とは何の縁もございません。しかしある日，恩師の小林忠教授の授業で，偶然に「不忍池図」と出会うという経験がございました。その日が，私の運命の分かれ目と言ってもよかったと思います。

今でもその日のことは，忘れることができないほど感動的なものでした。おそらく秋田蘭画と出会わなければ，私はこの道に進むことがなかっただろうと，今でもそう思っております。

今日お話しをさせていただきますことは，私の研究のほんの一端でございます。また，実は詳細に説明申し上げなければいけないことがあるのですが，どうしてもこの９０分という短い時間の中では，お話しきれない部分も多いかと思います。ただ今ご紹介いただきましたように，私には秋田蘭画に関する著作が２冊，『秋田蘭画の近代』（東京大学出版会，2009年）と，そして今では残念ながら店頭で買えなくなってしまった本なのですが，最初の著書『江戸の花鳥画』（スカイドア，1995年）という本で，初めて秋田蘭画のことを書いております。私が芸術選奨新人賞を頂いたのは，おそらく秋田蘭画を博物学という視点で見直したことが，一番高く評価された点ではなかったかと考えております。その２冊が，私にとっての秋田蘭画研究の主著でございますが，もう一つ，今日こちらに持って参りましたのは，本日お話をさせていただきます，平福百穂の秋田蘭画研究の大著でございます。一般的には『日本洋画曙光』（にほんようがしょこう）という題名で知られている本の文庫版で，私が解説をつけさせて頂き，岩波書店から２０１１年１２月に出版されたものです。こちらの「解説」に書かせて頂きましたことを，本日はダイジェストでお話をさせて頂きたいと思います。

さて本日のお話でございますが，秋田蘭画の作品についてのお話というよりも，秋田蘭画が如何に，この近・現代に見出されてきたかということを，私の研究の中で新たに分かってきました事実と共に，今日はお話させて頂きたいと思います。

お手元にプリントを配らせていただきました。レジュメが６枚と大変多い分量で申し訳ございません。少し珍しい文書資料などをそのまま掲載させて頂きましたので，適宜その都度お目通しください。

本日の話題でございますが，以下のように①～⑤まで挙げさせていただきました。

① はじめに——現代日本と秋田蘭画再発見
② 秋田蘭画派とは何か？
③ 百穂と狩野亨吉——秋田蘭画との出会い
④ 百穂『日本洋画の曙光』の問題点
⑤ 平福百穂と知の共同体——結論

まず①では，現代日本と秋田蘭画という流派の再発見について。それから，②秋田蘭画派とはどのような画派であったか。③秋田蘭画は如何に見出されたか。そして④秋田蘭画を世に出した日本画家・平福百穂の主著『日本洋画の曙光』にも問題点があるということ。最後に，⑤平福百穂が如何にして，明治から昭和にかけての時代で，その文化的・知的環境の中で秋田蘭画研究を進めたのか――というようなことを，順次お話しさせて頂きたいと思います。

① はじめに――現代日本と秋田蘭画再発見

現代の私達にとりまして，秋田蘭画というものがまず紹介されるとき，それは教科書やテレビ番組などでもそうだと思いますが，「秋田蘭画＝不忍池図」というイメージが，もはや揺るぎのないものとして定着していると思います。私が調べた限りでございますが，美術史の教科書においては必ず「不忍池図」が取り上げられておりますし，その理由は，この作品が重要文化財に指定されているということが，第一の点だと思います。小田野直武の「不忍池図」はいつも本の中で見ておりますと，その元の大きさというのが分からなくなってしまうのですが，縦98.5㎝，×横132.5㎝という，実は秋田蘭画作品の中でも最大の大きさを誇っております。もう少し美術史的に申し上げますと，いわゆる「実景図」と呼ばれるジャンルに属し，実際に存在する風景を描いた江戸時代絵画の中でも，これほどに大きな作品は他にも数点しか存在しておりません。いわゆる日本画で，絹地の上に伝統的な画材で描かれております。皆様よくご存知のように，現在は横手市の秋田県立近代美術館に所蔵されております。

さて先に結論的に述べますが，実は秋田蘭画を世に広く知らせた平福百穂は，この作品の存在を生前中には知りませんでした。なぜかと申しますと，「不忍池図」が発見されましたのは戦後のことで，平福百穂は昭和８年の段階で亡くなっております。百穂が秋田蘭画を再発見したのは，１９００年頃。当時「不忍池図」は，もちろん影も形も知られていませんでした。単純なこの事実は，これまで大いに見落されてきたと思います。

「不忍池図」が発見された経緯を次にまとめてみました。現在までに分かっている事実です。１９４８年（昭和２３年），一説に山形県賀茂町で発見されたと言われております。発見されたときは軸装で，現在はアクリルガラスの額縁に入っておりますが，元来は掛け軸の形でございました。１９５９年頃まで，秋田県土崎のさる富裕な個人の方が所有されておられました。その方がお亡くなりになられましたあと，秋田銀行が一時所有しまして，さらにその後，秋田県に寄贈されたという経緯があり，現在では秋田県の所有ということになっております。

そして１９５３年（昭和２８年）に秋田県の指定文化財となります。この頃のことですが，秋田県の知事室に，軸装のままで一時実物が部屋に飾られていたという逸話もあります。昭和３４年頃に，軸装から現在の額装に変えられたということが分かっており，さらに１９６８年（昭和４３年）に国の重要文化財に指定されました。いわゆる江戸時代の＜洋風画＞といわれる作品の中で，最も早く国の重要文化財指定を受けているということも，大事な点だと思います。従いまして，１９３３年（昭和８年）に没しております平福百穂は，「不忍池図」を知ることはありませんでした。

では次に，秋田蘭画派とはどのような画派であったかということを，簡単にまとめておいてみたいと思います。

② 秋田蘭画派とは何か？

秋田蘭画派という画派は，江戸時代美術史では「近世洋風画」という範疇に括られている画派です。時代的には１８世紀の後半，その制作年代は僅か６～７年という，非常に限られた短い時間に生まれそして消滅していった画派であります。

小田野直武筆「不忍池図」に代表されますように，殆どその多くはいわゆる洋画とは異なりまして，油絵のような類のものではありません。完全に伝統的な東洋画の画材，すなわち絹本あるいは紙本，そして墨や顔料を使って描かれております。一部分に同時代に西洋から輸入されたと思われる絵具「プルシアン・ブルー」などを使っているということは，近年科学的調査で分かっておりますが，しかし，描線などは東洋画

の伝統的な描き方を踏襲しております。

また，西洋画に特徴的な遠近法については，直接眼で見て学んだと言った方がよく，西洋の画法書などを論理的に読みこなして学んだものではなくて，当時輸入された銅版画から感覚的に見て学び，そしてそれを応用的に日本画に使った――そういう画派であったと言えると思います。

秋田蘭画派の基本情報をまとめておきます。いま申しましたように，日本在来の伝統的な画材を使って，初めて日本において本格的に洋画を描こうとした画派であります。画派の起こりの発端は，博物学者の平賀源内が，秋田県内の阿仁銅山の開発のために，秋田藩に招聘されたことに由来しています。安永２年（１７７３年）の夏，平賀源内が角館藩士の小田野直武に洋画法を伝授したという伝承があります。それを秋田第八代藩主・佐竹義敦こと曙山，角館城代・佐竹義躬，秋田藩士・田代忠国，荻津勝孝など秋田藩に関わる人達が，小田野直武を実質的な指導者とする形で絵画サークルを形成します。いわゆる趣味サークルの延長線上にできた画派であったと言ってよいでしょう。

もう一つ大事な点でございますが，安永２年（１７７３）というこの時期，今ここに挙げました人達は，みな２０代半ばの青年でありました。彼らがまだ年若く，実にフレッシュな感覚の中で，最先端の洋画というものに接触した点も大事だったと思います。

いま申しましたように，秋田蘭画はあくまでも＜洋風画＞でありまして，いわゆる＜洋画＞ではありません。基本的には，これは日本画のジャンルに含まれます。基本的な構図や，また細密描写という画法が使われていますが，これも実は当時中国から入って参りました「沈南蘋流派」という中国の花鳥画の画法から学んでおります。

陰影・明暗法そして遠近法，これらは舶来の銅版画から学習しました。作品は主に分類としては花鳥画，山水画，そして人物画となっております。人物画の中でも，美人画が多いのも，秋田蘭画の大事な特徴だと思います。従いまして，「不忍池図」は，花鳥画と風景画が組み合わされておりますので，これは「花鳥山水図」，あるいは，「花鳥山水画」と呼ばれるジャンルに属します。そして，「不忍池図」の手前には，二つの大きく芍薬の花が描かれておりますが，そこには小さなアリが描かれています。こうした微細な生物への眼差しは，同時代の科学である＜博物学＞の影響を大変に強く受けておりました。

さて小田野直武は，秋田蘭画派の中でも最も身分が低い下級武士であります。しかし，その直武が実質的な指導者でありました。秋田蘭画派では，直武の描いた動植物の絵を，サークル内の画家たちが模写や応用的に用いて別の作品を仕上げるなど，積極的に転用されたことがわかっております。

こちらは，八代目藩主・佐竹曙山が描きました「松に唐鳥図」（個人蔵）です。現在は国の重要文化財に指定されています。秋田蘭画の特徴とされます，近接拡大構図が用いられています。手前に大きな松の枝や幹を描きまして，その足元に――掛け軸という縦長の画面なのでどうしてもこのようになりますが――下の方に風景が描かれてあります。科学的には，大変アンバランスな遠近法でございますが，しかし当時の人々にとっては，きわめて斬新で目新しいものであったと思います。鑑賞者は，かなりアバンギャルドな印象を受けたのではないでしょうか。実際これをご覧になった方はよくお分かりだと存じますが，手前のこうした幹は，大変微細に描かれております。本物の松の幹を観察し，その繊細さ，あるいはそのごわごわとした感触や手触りが，非常によく再現されております。手前にこのように大きくモチーフを描き，後ろに風景を配置するという近接拡大構図――これが秋田蘭画の特徴の一つです。

先ほど申しましたように，秋田蘭画派は同時代中国の最先端の花鳥画，沈南蘋流から学んでおります。こちらの作品は個人蔵の小田野直武筆「牡丹図」です。やはり，近接拡大的を用いて牡丹の花と岩が組み合わされています。それ自体は伝統的な漢画の様相を呈しております。しかし，足元の方に小さく風景を描き，これは＜洋風画＞なのだと主張をしているわけです。

さらに，こちらをご覧頂くとお分かりかになるかと思います。左の図は，江戸で活躍しました沈南蘋流画家・宋紫石の作品です。小田野直武は江戸に出て，この宋紫石の絵を見たり，あるいは彼から直接に習ったという可能性もあることが分かっております。画題としても大変似ておりますし，また，このように対角線上に構図を埋めるような牡丹の花の組み合わせ方も似通っていることが，一目瞭然だと思います。

また，もう一つ大事な点でございますが，こちら「不忍池図」の芍薬の花の部分図です。左側が赤い芍薬，右側が白い芍薬の拡大部分図です。実はよく見ますと，この花は下書きの線が殆ど消されるかのごとく

に，塗りつぶされております。美術史的にはこのように，描線を殆ど消してしまう描き方を没骨法，また描線を描き起こす方法を鉤勒法と申しますが，普通はどちらかに偏った描き方をいたしますが，沈南蘋流ではこれを，組み合わせた形で描きます。具体的には，花の部分はもともとの質感の柔らかさや透明感というものを出すために，塗りつぶしてしまいます。これが没骨法です。しかし，葉や葉の細部に至る部分や，幹や枝のこういうところは墨や色彩を用いて細い線で描き起こします。これが鉤勒法です。

その二つを組み合わせたものを，「勾花点葉体」と申します。美術史的には，これは中国の花鳥画から入ってきていることが分かっておりますが，秋田蘭画派にはこの描写法が使われています。

さらに，直武が描いた絵からの転用ということが，秋田蘭画派では重要です。今，こちらにお見せしているものは，これは，角館城代・佐竹義躬が描きました牡丹の絵です。義躬の作品としては，おそらく最晩年で，私自身はこの作品は彼の亡くなる１～２か月前に描かれたものだろうと推測しています。実はこの作品とほとんど花の表情が同一の直武画があります。

これは，もともとの直武が描いた下絵から，こちらの佐竹義躬の絵までは，３０年以上の時間的開きがあるということが分かっております。ですので，おそらく直武が描いた写生図から応用的に佐竹義躬が描いたということが分かるのです。

このように秋田蘭画派では，小田野直武の影響というものが極めて大事でありますし，また，その小田野直武によって描き残されたものが，そのあとにサークル内の他の画派達の間に受け継がれたことも重要であるということです。

しかしその後，平福百穂によって秋田蘭画が見出されるまでには，１００年以上も時間を要することになります。平福百穂はいかにして，秋田蘭画と出会ったか。そこには百穂一人の力ではかなわないことが沢山ありました。そこで，次にご紹介したいのは，狩野亨吉という学者の存在であります。

③ 百穂と狩野亨吉――秋田蘭画との出会い

こちらは平福百穂が１９３０年（昭和５年）に刊行しました，秋田蘭画研究の集大成『日本洋画の曙光』の初版です。『日本洋画の曙光』の初版は，元は大きな帙に入っておりまして，その中に一枚ごとに刷られた３０枚のカラー図版と，それとは別に冊子で解説がついています。これは，その表紙部分の写真でございます。発行しましたのは岩波書店です。

簡単にご紹介したいのですが，実は岩波書店の創設者であります岩波茂雄は，短歌集団『アララギ』の立役者の一人でありました。皆様ご存知の通り，平福百穂は歌人としても知られており，アララギ派を代表する歌人の一人でもありました。そういった関係から，この『日本洋画の曙光』は岩波書店から刊行されることになったことが分かっております。もう一つ，岩波文庫は１００年以上の歴史で，ずっと変わらずにこの薄茶色の表紙に唐草模様の独特なデザインが守られていて，後ろには壺型のマークがありますが，そこに「岩波」と書かれてあります。この装丁形式は，岩波茂雄が初めて岩波文庫を世に出すときに，知己でありました平福百穂にデザインを依頼し，それが現在でもそのまま使われております。これは大変象徴的なことだと思います。偶然なことだったのですが，昨年私が『日本洋画の曙光』を岩波文庫で復刊させることが出来たことは，これもやはり何かの縁ではないかと思っております。

では次に，平福百穂がいかに秋田蘭画研究を行ったかということを，簡単にご紹介したいと思います。

百穂が秋田蘭画のことについて，初めて書きましたのは『美術新報』という，明治に創刊された美術専門の新聞――雑誌と新聞のちょうど中間的なものなのですが――その明治３６年１１月５日と１１月２０日の２回，上下という形で掲載されています。この二つが，彼の最初の秋田蘭画論であります。その後，明治４３年に『斯民』という雑誌，さらに『国民新聞』。それから『日本美術』，『書画骨董雑誌』等々，明治３６年に始まりまして，最後昭和５年に『日本洋画の曙光』として一冊の大著にまとめるまで，百穂は約２５年から３０年ほどの月日を研究に要しております。

実は最初の頃，秋田蘭画に関して百穂自身は，あまり好意的なことを述べていません。簡単に言ってしまいますと，秋田蘭画派というのは極めて稚拙な画派だ――というような評価をまず述べています。ただ一点，百穂がずっとこだわっていたことがありまして，それは秋田蘭画派が見出される以前，日本において洋

画というのは司馬江漢という人物によって世に広められたと言われているが，事実はどうもそうではない。司馬江漢は日本最初の洋画家ではなくて，それに先立って秋田出身の武士である，小田野直武が最初ではないのか――という情報がポロポロと周囲からもれこぼれてくる。それで百穂は資料の中から推定を始め，何とかしてそれを完全立証したいという思いから，秋田蘭画研究を開始しました。

百穂が秋田蘭画と「如何に出会ったか」という記述が，最初の論考である明治３６年１１月５日付の記事にあります。そこには「洋画は司馬江漢が初めて描いたという説に対して疑問があり，しかし小田野直武は司馬江漢よりも早く試みたというだけで，大成したとは思われない」というような言い方しています。ただ，世の人々があまりにも司馬江漢を持ち上げ過ぎている。明治になり，高橋由一という油絵画家がいますが，彼が司馬江漢のことを大変崇拝しておりましたので，そうしたところから，司馬江漢が歴史的に大変に重要な人物であるという捉え方がされてきました。

しかし，真実のところどうもそうではない――それをとにかく世に早く伝えたい。よって，この『美術新報』という当時としては最先端の美術新聞に，百穂はあえて掲載した訳です。

明治３６年の段階で，百穂が目にしていたと思われる小田野直武の作品，あるいは佐竹署山の絵はこのような作品です。まず右側の図は，これは小田野直武が油絵を模した作品で，当時「チャン」と呼ばれる中国からの渡来画材（膠のような用剤）で顔料を溶き，油絵風の艶感を出そうとして紙に描いた一見では油絵風の作品です。これは小田野直武の末裔に，現在も伝えられている作品です。もともとは，これと全く同じ作品がもう１点があったと言われておりますが，明治の終わり頃の角館の大火で，焼失したと言われております。

左側の二つの図，こちらが現在，佐竹曙山筆『写生帖』と呼ばれる画帖の中に含まれている，上が牡丹，下が蝦蟇蛙の図です。佐竹曙山の『写生帖』の中には多くの植物の図，あるいは昆虫や鳥などの博物学的な興味によって描かれた動植物が多数含まれております。

こうしたものも，既に明治３６年の段階で平福百穂が目にしていたということが，記事の中から漏れ分かって参ります。百穂が明治３６年の段階で確定した秋田蘭画についての事実は，次のようなことです。小田野直武の名前と生没年，それから平賀源内がいつ秋田に来て直武と出会ったか。藩主佐竹曙山も一緒に秋田蘭画を描いていたこと。そして，曙山と直武がほぼ同年齢であるとこと――ただし，正確には一つだけ直武の方が年下でしたが――そういった事実などがよく認識されております。

また直武の名前が，かの『解体新書』の跋文に見出されることも，百穂は指摘しております。実はこれが大変重要な事実です。明治３６年の段階で，この事実を百穂は知っておりました。

それから，『解体新書』の時代，司馬江漢が浮世師として活躍していたこと。そしてその事実は，江漢よりも直武の方が早くに洋画に興味を持ち，手を染めていた可能性があるということも言っております。

そして，小田野直武が平賀源内のもとで修行するわけですが，俗説で平賀源内の下僕を務めていた福介という人物がいた。どうもその福介が，武助こと小田野直武のことではないのか――というような疑問も持たれていたようです。しかし，福介は安永２年の段階で死亡していることを百穂は突き止め，福介と小田野直武は，別の人物であったということを断定しております。

ちなみに，この福介という人物が秋田出身であったというような説もありますが，これは確定できる資料がなく，現在でも不明です。

さらに，明治３６年の段階で，源内が鉱山開発のことで秋田に招聘されたらしい。それから直武が源内を介して，長崎に遊学したというようなことを百穂は言っております。しかし，私が調べた限りでは，直武は残念ながら長崎まで行っているという形跡はありません。さらに，直武は３０歳を越して間もなく吐血して亡くなった。これも明治３６年の段階で書かれています。

皆様ご存知だと思いますが，「直武自害説」というものが一説には世に流布いたしておりまして，今でもテレビ番組などでは，そのエピソードがまことしやかにナレーションとして挟み込まれたりしておりますが，私はその説には反対でございます。私は，直武はおそらく病死したのであろうと考えております。江戸において小田野直武は，非常に近しく平賀源内のもとで学んでおりましたので，源内の咎科に連座して蟄居という形を取らざるを得なくなって江戸を去り，そして，角館に戻ったところ半年後に病を得て亡くなってしまった。一説には，その蟄居で，絵を描くこともままならないまま，失意のうちに自害したのではないか

という，そのような俗説がそののち流布しておりますが，しかし，どうも事実ではない。もともと直武は大変病弱だったようでして，江戸において病身を押して洋画を学び続け，最後はやはり無理がたたって吐血した――明治時代に直武の末裔に言い伝えられていた話です。おそらくは結核か何かの病気で亡くなっている可能性が高いと，私はそのように考えております。

小田野家の分家というものがありまして，そこには，源内が直武に宛てた手紙があったというような記事もあります。原本はすでに失われているのですが，直武は晩年に非常に傲慢だったというような言い伝えが残っておりました。しかしそれに関しては，かなり懐疑的にならざるを得ないところがございます。

さて，百穂が秋田蘭画を発見した，その真実とは如何なるものであったのでしょうか――。実は百穂が秋田蘭画を再発見するには，その前段階がありました。百穂自身は『日本洋画の曙光』で，自分は幼い時に直接秋田蘭画を目にし，そこで初めて見出したというようなことを言っておりますが，実はそうではなく，狩野亨吉と国府犀東という二人の人物の示唆というものがございました。

まず，国府犀東は金沢出身の文章家です。明治３４年百穂が２５歳，犀東が２９歳の折，現在の新潮社の前身であります雑誌『新声』に百穂が加わったことがきっかけで二人は知り合いました。この時から，百穂と犀東の親しい交流が始まりました。

国府犀東と百穂は生涯の友人で，国府犀東のエッセイ集『不二一周』は百穂と共に旅行した記録でもありますが，そこにはたくさんの百穂の手による風景図が所載されております。

さて，百穂は昭和８年に脳溢血で秋田の地で亡くなります。実の兄が亡くなってそれに駆け付けたところ，葬儀が終わったところで自らも倒れ，そして亡くなってしまうという悲劇でした。享年は５７歳です。翌年雑誌『アララギ』で「平福百穂追悼号」というものが組まれ，そこに国府犀東は友人として「百穂画伯の苦練時代観」という追悼文を載せています。実はこの中に，百穂と秋田蘭画の出会いを窺わせる貴重なエピソードがございます。

レジュメの資料１をご覧ください。大変長いので後ほど改めてご覧頂ければと思いますが，これを読んで参りますと，実はさらに狩野亨吉という人物によって，国府犀東も秋田蘭画のことを初めて知ったという事実が出て参ります。そこに「学生の時，その門に入り塾に住み」とありますので，国府が狩野の私塾で学んでいたことが明らかです。狩野亨吉は，秋田・大館出身の大学者であります。狩野亨吉は，どうやら日本で初めて洋画というものに興味を持った人物が秋田に居たのだ――という事実を，資料を見せながら，若き国府犀東に示したと綴られております。

２ページ目をご覧下さい。先ほどの続きです。その中に，その後，『日本洋画の曙光』の中に入っている図版等々は狩野亨吉より示されたものと同じものが所載されていると言っています。そしてそのことが平福百穂に「エレキの閃めきを与えた」というようなことも，国府は証言しています。つまり，狩野からの情報は平福に非常に知的な刺激を与え，そして，その後の秋田蘭画研究というだけではなく，平福百穂自身の作画活動にも大きく影響していっているということを，国府は述べているのです。

狩野亨吉について，さらにお話しをしたいと思います。狩野亨吉は先ほど申しましたように，秋田大館の出身で，父親は大館藩の重臣を勤め，漢学者でありました。確か狩野亨吉の叔父にあたる方は，現在の秋田魁新報社の創設に関わったと聞いております。狩野亨吉は現在では忘れられてしまった大学者でありますが，漢学者で科学者，そして，個人で１０万冊以上の古典籍を集め，その後それを現在の東北大学に譲渡し，現在それらは「狩野文庫」という名で東北大学附属図書館に納まっております。コレクション１０万冊以上のおもな中身は和本・漢籍，あと１８～１９世紀に渡るいわゆる洋書の類でございますが，素晴らしい個人コレクションであります。そしてそれが，そののちの現代にまで続く日本の古典学研究にとっては，なくてはならないコレクションとなりました。狩野亨吉によって発見された江戸時代の科学者達の中でも，とくに大事な学者が３人おります。志筑忠雄という天文学者――この方はカントやラプラスの星雲説に匹敵する太陽系の生成論を，彼らとほぼ同時代に既に提唱しているということを，狩野亨吉が突き止めております。

それから，本多利明。この方は経世家で天文・地理学，それから航海の学を究めた方です。ヨーロッパ事情に関する多数の著作を残していますが，やはり，その洋学という点において大事な人物でありまして，日本の近世史，特に幕末期の西洋事情ということについて考える上で，大変重要な人物です。

そして何よりも狩野亨吉が見出した江戸時代学者で最も重要な人物は，思想家で医師でもある安藤昌益です。秋田に関わる大変に重要な人物でもあります。この方を発見したことは，学者である狩野の，非常に大きな功績だったと思います。昌益自身の自筆稿本『自然真営道』，その原本は残念ながら焼失してしまいましたが，狩野亨吉によって書き写されたものが，そののち広まり，現在に知られております。共産主義，農本主義また現在のエコロジーというものに通じる思想に，昌益はほとんど独学に行き着きました。１８世紀の思想家・哲学者として，現在では安藤昌益のことは重要であると，世界的にも認識されております。

こうした学者たちを狩野亨吉が自分の足と目で探し当て，そしてそれらの人物の著作を読破し，さらに書き写して今に伝えるという，大変な仕事を成しております。

レジュメの資料２をご覧下さい。森銑三という江戸学者が，１９６０年代に『明治人物夜話』という著作で，狩野亨吉と初めて出会ったときのことを記しております。それを見ますと，狩野亨吉は大変に質素な家に，確かお姉さんと二人暮らしをされていたようです。狩野は生涯独身であったそうです。東京帝国大学で大学院まで修め，そしてそののち京都帝国大学文科大学初代学長にまで上り詰めた方ですが，色々なことから政治闘争に巻き込まれ，そしてその空しさから大学人としては表舞台を離れ，そして東京に戻って，その後は生涯市井の学者として，書画や刀剣類などの鑑定を生業として生きました。

こういった人物とまず国府犀東が出会い，そして国府犀東が次に若き日の平福百穂と出会って，君の故郷である秋田に，どうもこのような画家達が存在していたようだと言って，秋田蘭画派のことを伝える。そこで初めて平福百穂は，秋田蘭画に出会ったということが分かって参りました。

こうした事実は，美術史研究の中でも長らく認識されておらず，平福百穂が独自に秋田蘭画派を再発見したと思われておりましたので，重要な事実ではないかと思います。

狩野亨吉が，まず秋田蘭画と出会ったことは間違いありません。今，申しましたように東北大学の「狩野文庫」にはもちろん『解体新書』があります。この『解体新書』の巻之五には，「小田野直武画」という明らかな書き入れがございます。それを狩野亨吉が見ていないわけがありません。同じ秋田藩士の家に生まれた狩野ですが，その事実に非常に興味を惹かれたということは，充分に推測し得ると思います。

なぜなら，杉田玄白の『解体新書』（ターヘル・アナトミア）は科学書です。科学書であるがゆえに，なおさら狩野亨吉を惹きつけたに相違ありません。

しかしこうした事実は，平福百穂が秋田蘭画を研究したということを，決して貶めるものではありません。まだいわゆる近代的な学問というものが完全に成熟しきれてない明治時代，特に，美術史という学問はその当時では歴史的にも伝統の浅い学問でした。しかも平福百穂は日本画家という実作家でありまして，もともと歴史家でないわけです。ですから，ほとんど手さぐりで美術史研究を行ったと言ってもよかったのです。ですので，この『日本洋画の曙光』という著作がどういう形でまとまっていったのか，そしてどこが問題なのか，それをもう一度確認していきたいと思います。

資料３をご覧下さい。岩波書店によって『日本洋画の曙光』が売り出されまして，その当時の宣伝文がこちらです。『アララギ』の「平福百穂追悼号」の巻末に載っております。赤いページの紙で変だなと思われるかもしれませんが，これは当時そのまま刷られた状態のものです。ここをご覧下さい。明らかに書名が『日本洋画の曙光』となっております。実は国立国会図書館，その他諸々で登録されている書名は，「日本洋画の曙光」の「の」というのが抜けてしまった形で伝わっています。データベース検索するとそうなっています。

しかし，出版された当時は明らかに『日本洋画の曙光』と題しておりました。これは，書誌学的には大変重要な事実でありまして，どうして『日本洋画曙光』となってしまったのか――それは，原本の冊子体に題字した青木豊陵なる人物が「日本洋画曙光」と，漢字のみで揮毫したためだと思われます。漢詩文的に読めば「日本洋画「の」曙光」と，そのまま「の」の字を入れて読んでいたと思いますので，おそらくは後代の

人たちが，「の」を読み落としてしまったと考えられると思います。

さて，お手元のプリントには宣伝文の全文を挙げておきました。それを見ますと明治３５，６年の頃から，百穂は秋田蘭画研究に邁進したということが書かれております。岩波書店の出版記録の台帳を私は見せて頂いたのですが，そこに『日本洋画の曙光』という書名で，明らかに岩波書店も出版したという記録が確認できました。ただ残念ながら岩波書店には，一冊しか元の初版本が残っていませんでした。しかし，東京は第二次世界大戦で空襲にも見舞われましたし，よくその戦火を逃れて実物原本が岩波書店に残っていたなと思います。岩波書店に残っていた初版本は，大変状態の良いものでございました。

④ 百穂『日本洋画の曙光』の問題点

さて，『日本洋画の曙光』の「巻末記」に書かれた内容と，最初の百穂の研究である明治３６年の『美術新報』の記事には，齟齬する部分があります。実は『日本洋画の曙光』の「巻末記」には，直武の生没年が分からないとか，直武が長崎に赴くにあたって平賀源内の下僕となった云々とか，そういうことがなぜか書かれています。実は既に明治３６年の段階で，百穂は直武の生没に関して，寛延２年（１７４９年）秋田角館で生まれて，故郷において３０歳を越して間もなく血を吐いて死んだらしい云々，というようなことを書いています。もちろん完全に正確なものではありません。直武は江戸で死んだのはなくて，実際は遠慮を申しつけられている間に角館で死亡しておりますので，これに関しては，後々の研究の成果で訂正しなくてはいけないのですが，しかし，もう明治３６年の段階で，ある程度の正しい情報を得ていたにも拘わらず，百穂はなぜか３０年以上あとに書いた著書『日本洋画の曙光』の中では，事実をあえて有耶無耶にしてこれを記述しているのです。

さらに『日本洋画の曙光』の決定的な問題箇所という部分があります。それは，百穂が『解体新書』を「発見した」というようなことを，書いてしまっているところです。

レジュメの資料４をご覧下さい。『日本洋画の曙光』の「巻末記」の部分です。これを見ますと，自分が明治３６年に第一回目の秋田蘭画論を発表して，その翌年に浅草の古道具屋で『解体新書』を見つけたというエピソードを書いています。現代でまさか浅草の古道具屋さんで『解体新書』全巻が見つかったら大変な事件になると思うのですが，近年，神田神保町で売られていた初版の『解体新書』全巻揃いは，３５０万～４００万円と言われておりました。それはさておき，百穂によりますと，これ（解体新書）を見てみると，中に「東羽秋田藩小田野直武」の文字が書いてある。それで私（百穂）は「僅か六銭」で直ちに買って，それを持ち帰ったと書いています。しかし小さく註書きとして「惜しい事にこの本は大正１２年の関東大震災のときに，貸していたものを焼失してしまった」というようなことが書いてあります。先ほど言いましたように，百穂は２５，２６歳の頃にすでに国府犀東を通じて狩野亨吉の手元にあった資料等々を見知ったわけです。ですので，あえて明治３７年頃に自らが古道具屋さんで見つけたなどということを言わなくてもよかったはずなのです。むしろ国府犀東を通じて，秋田蘭画についての知識を初めて知ったということを，証言してもよいはずでした。しかし百穂自身からは，一切それについての記録は残されませんでした。

では，百穂による秋田蘭画評価の何が「功績」だったかと申しますと，これは司馬江漢に先立つとされる秋田蘭画が，日本洋画の「中興の祖」だという可能性の高さを，立証して見せたことだと思います。そして秋田蘭画派が習得しておりました絵画技法というものを，明治の世に再発見し，そしてそれを広く報道することを意味しておりました。

資料５をご覧下さい。実はこれは，平福百穂自身が書き残した大正４年，および『日本洋画の曙光』の本文編につながる〈秋田蘭画伝説〉に関しての記述です。

平賀源内が安永２年に秋田藩の招請によりまして阿仁銅山に赴くために，その途中秋田角館に立ち寄ります。源内は角館の五井家という醸造元に泊まることになるのですが，その晩に，大変に素晴らしい絵がその家にあることを見つけます。聞くところによると，小田野直武という，当地の武士で若い画家が描いたものだと知り，大変にその才能があると見込んだ源内は，すぐにその若者を呼び寄せ，始めて対面します。その時の出来事が次のような伝説として，今に伝えられています。

――直武の画才を見抜いた平賀源内は，直武に対し，二つの鏡餅が重なっているところを，真上から見た

図を描くように言った。そうしたところ，直武は素直に円を二つ，大きい円と小さい円を重ねて描いた。それを見た平賀源内は絵筆をとって，これでは餅か皿か，何であるか分からないだろう――しかしここに，このように影というものをつけることによって，二つが重なっている立体感を表現出来るのだ，と影を描いてみせた――。これが洋画の基本的な理論である陰影法を示したエピソードとして，今でもまことしやかに語られる伝説であります。

ただしこの伝説には，前段階がありました。次の資料５の（１）をご覧下さい。大正４年の段階で，平福百穂が秋田蘭画サークルの画家の一人，荻津勝孝の子孫から聞いたという話です。そのときに，この子孫にあたる老人は９０歳を越えていて，荻津助吉といいました。荻津勝孝は助吉の祖父にあたる人だったということです。かつて荻津勝孝は，西洋画というのは行燈を用いて夜描くとよい，そうすると光りと影というものがはっきりと出るからというようなことを言って，その洋画法を平賀源内から教えられたのだ――という話になっております。

実は陰影法に関するこの伝承というのは，大正４年の『書画骨董雑誌』に載った，荻津助吉の記録が最初です。それがのち，昭和５年の百穂『日本洋画の曙光』の本文編になりますと，平賀源内が小田野直武に鏡餅の絵を描かしめたのだと，そういう話に変わっています。しかし，残念ながらこの鏡餅云々の話を証明するものは何もありません。なぜか『日本洋画の曙光』の方では，荻津勝孝のエピソードというのは採用されていないのです。非常にこれは不可解な点であり，問題点であると思います。

大変に魅力的な「鏡餅伝説」なのですが，実はこれも先ほどの直武自害説と共に，少し史実としては慎重に扱わないといけないことではないかと，私は思っております。

⑤ 平福百穂と知の共同体――結論

最後に平福百穂と知の共同体ということで，まとめに移らせて頂きたいと思います。平福百穂が秋田蘭画研究を始めた明治３５，３６年頃，つまり１９００年前後の日本画壇や美術界が，どのようなものであったかということを，ここでおさらいしていきたいと思います。

まず芸術の分野における「和魂洋才」の思想です。明治１５年（１８８１年）にアメリカの学者フェノロサが，『美術真説』というものを日本において説きます。そして，そこに「妙想」（idea）という理念を打ち出しました。

これは日本画といわゆる油絵とを比較した上で，よりidea〈妙想〉というものが日本画において発生し得るというような主張で，日本画の優位性を述べております。当時は西洋画に対する意識というものが非常に強くなっていた時代だったわけですが，しかし，そこに日本画の優位性というものがフェノロサによって提唱されたことによって，伝統復興というものが考えられます。つまり簡単にいうと，洋画排斥運動というのが一時的に起こるわけです。そのことによりまして，東京美術学校――現在の東京芸術大学の前身ですが，開校（明治２２年）の段階では，日本画だけが「絵画科」として名乗り，単独でスタートしております。

その後，明治２６年（１８９３年）に黒田清輝が，ちょうど印象派の活動が華々しいフランスより帰国いたします。そのことによって一気に新派系の洋画――これはいわゆる油絵を用いた洋画ですが――洋画家達が台頭いたします。

さらに明治２９年，岡倉天心は東京美術学校長として黒田を迎えることを決断いたします。このことによって，絵画科は日本画と西洋画科――これは後の油絵学科ですが――この二つに分かれることになります。これが日本の近代美術史上における，重要な転換点となりまして，いわゆる日本画と洋画というものが別途に分けられて，別ジャンルの物として，完全に位置付けられる分岐点となります。

そのことによって，若き画学生達も自分達が美術学校に入る以前に，日本画を学ぶべきなのか，あるいは洋画をやるべきなのか，どういう選択をして学び始めるかということを，強いられるようになるわけです。つまり両方を一緒に学ぶわけではなくて，まず自分はどちらのジャンルに所属すべきなのかということを，考えざるを得ないという状況になります。

しかし制度上の二分化というものが，画家自体の思想や理念というものと，完全に一致するとは限りません。時代はまだ明治前半期でありますし，しかも，江戸以来の知性というものは，まだ脈々と息づいている時代でもありました。いわゆる「和魂洋才」の時代です。まだ「和」の部分に対しての，誇りや意識とい

うものが失われているわけではありませんでした。「日本の絵画は何を描くべきなのか」――これが，明治２０～３０年代の美術界の本質的な問題点でありました。それは洋画が抱える問題だけではなくて，日本画にとっても同じく深刻な問題であったわけです。

明治３０年代以降の「日本画」というのは，実は「自然主義」という傾向になっていきます。これは，文学や文芸の分野においての傾向と機を一にしていくことになるのですが，明治３０年代の若き芸術家達，特に日本画を志す若手絵画の研究団体やグループ達が次々に生まれます。その代表格となるのが，実は平福百穂とその親友であった結城素明という画家が所属いたしました无声会（むせいかい）でありました。

近代美術史上のポイントですが，无声会の旗揚げというのは明治３３年（１９００年）です。これは百穂による秋田蘭画研究が開始される時期と，ほぼ同時期でもあります。これは大変重要な事実です。

无声会とはどのような組織だったのか――。『絵画叢誌』という雑誌の中にこの会の「會旨」と「會規」というものが明らかにされています。それを読みますと，「自然主義を綱領とす」，あるいは「常に自然の研究に尽し」というような一文がありまして，この自然に則するということ，これを自分達の絵画理念の中心にしています。この一文だけでは「自然主義」や「自然」というものが具体的にどのようなことを指すのか分かりませんが，実は大村西崖という美学者の研究理念というものを，无声会は理論的背景として活動を進めました。

无声会が掲げましたこの「自然主義」というのは，岡倉天心らが掲げた「理想主義」（idea）と，真っ向から挑戦するものでした。日本美術院が主にその主題として書いていたのは，題材を和漢の歴史や神話の重厚さ，崇高さ，そういうものを大作の画面に仕上げ美術展などに飾るものでした。それに対して一方の无声会は日常的な風景や人々の様子を，出来るだけあっさりとした色彩と軽妙なタッチで描いて見せる――そういうことを標榜とし，あまり大きくない小作品が展示の中心でした。つまり展覧会場に行くと明らかに，日本美術院の作品と无声会の作品とでは，好対照だったわけです。ですので，その活動というのは，二つは全く違っていたということになります。

こちらにあげましたのは，現在，東京芸術大学大学美術館に所蔵されております平福百穂の「田舎花嫁」と題される作品です。本当にあっさりとした色調の作品でして，秋田の一農村の花嫁行列の風景を描いています。平福百穂の１９００年前後の作品の，代表作の一つだと思います。本当にそれまでの日本画の画題の中では，このようなごく日常的な光景を描くということは，珍しかったと言ってもいいと思います。

これは平福百穂の一例でありますが，他にも无声会に集った人々の作品は，極めて日常的に目にするような草花や器物，あるいは人々の風俗，そういったものが意識的に選ばれ描かれておりました

先ほどお話ししましたように，无声会の「自然」や「写実」「写生」という理想は，大村西崖の理論が背景としてありましたが，それをそのまま作品上に実現することは，画家たちにとっては決して平坦なものではありませんでした。その一例として，平福百穂の親友でありました結城素明という画家の例をお話ししたいと思います。

素明は明治２２年に神田英語学校に入学していまして，早くから西洋に関心があったことが分かっております。同２４年，岡倉天心の紹介で日本画家・川端玉章に入門し，そこで平福百穂と出会い，親友となります。そして翌２５年，東京美術学校の日本画科に入るわけですが，後にもう一回西洋画科に再入学しています。結城素明は終生，日本画と西洋画を折衷したような作品を描き続けます。彼は西洋絵画研究を，一生怠ることがありませんでした。

一方平福百穂の例です。百穂も日本画から始めます。絵の手ほどきをしてくれた父の平福穂庵が早くに亡くなってしまい，父の門弟の辻九皐という方に習っていたわけですが，やはり川端玉章門下に入門いたします。そして，明治３０年に東京美術学校の日本画科に入学し，飛び級で第二学年に入ります。そして，明治３３年に无声会が結成されますと，二度目の上京でそのメンバーとなります。そのあとですが，明治３５年にもう一度，東京美術学校の西洋画科にも入学しています。そしてその後「太平洋画会」という，洋画研究のサークルにも入りまして，そこで，西洋画のデッサンを習うために夜間部に通っていました。

さて，この明治２３年から３７年までの間に，日本画壇で起きていたことを整理してみます。

明治２６年に黒田清輝がフランスより帰国いたしまして，外光派というものがヨーロッパより入って参り

ます。そのあと，黒田清輝による「朝妝」――これは女性の裸体画を描いたことによっての裸体画論争――ヌードは芸術か否かという論争です。そのあと同２９年の「白馬会」の成立。これは「太平洋画会」とも直結するものです。そして同じ年，東京美術学校で西洋画科が出来，日本画科と分かれていきます。そして明治３２年に，岡倉天心が東京美術学校校長を罷免され，そして，それに反発した教授陣が大量に辞めてしまう事件が起きます。このことによって「日本美術院」が結成され，非常に目まぐるしく日本の美術界は変貌していきました。

こうした状況を見てきますと，若い画家達はそのまま画壇の激変ぶりに翻弄されていたということが言えると思います。しかしそれは，単に政治的な闘争に巻き込まれたということ以上に，やはり何をどう描くのか，自分達は何を目指すのか，どのようなアーティストになりたいのかということを，常に突き付けられながら新しい芸術を模索していた――というに他なりませんでした。こうした美術界の動きに対し，百穂が明治３４年に秋田蘭画と出会い，そして２年後に最初の秋田蘭画論を発表するという時期が，ぴったりと一致しているわけです。さらに，その上この時期に「美術新報」のような新聞が発行され，そこに秋田蘭画派が紹介されたということは，偶然のことではなく，非常に重い出来事だと思われます。近代美術史上においても，非常に興味深い事実なのです。しかし長年，美術史家達はそうした事実を，近代美術史の問題として捉えることはありませんでした。やはり平福百穂という日本画家が，秋田蘭画派を見出したということ自体が，日本近代美術史上の一大事件だったと思います。そして，平福百穂と彼の周辺にいた知の共同体としての知識人達によって秋田蘭画が発見され，それが百穂を通じて世に知らされたということは，あらためて大事な点であったと言えると思います。

最後ですが，長らく秋田蘭画研究は，秋田生まれの百穂にとっては，「同郷の先覚者達へのオマージュ」ではなかったか――というような言い方がされてきました。

確かに，一端ではそういうことがあるのかもしれません。しかしそれは，完全にオマージュとは呼べないと思います。なぜなら，日本画の伝統的画材によって，そこに「西洋」というものをいかに導入し，表現しようとしたかという秋田蘭画家達の暗中模索は，それはそのまま明治の日本画家達が自分達にとっても，どうやって西洋と向き合って，そして，自分達の新しい芸術を如何に生み出そうとするのかということ――それと同じような苦闘を見る思いだったと思います。ですから私は，平福百穂が江戸の秋田蘭画の画家達の中に，明治の自分達と同じような悩みと，そして，挑戦というものを見ていたと思います。

もう一つ重要な点は，平福百穂が秋田蘭画派を知ったのは２５歳の時です。小田野直武や，そして，藩主佐竹曙山達が洋画に目覚めていったのも，同じ２５，２６歳の頃でした。それは，本当に歴史を地続きのように，先覚の人々の意識や情熱というものを，自分のものとして感じたに相違なかっただろうと，私は強く思います。

資料６をご覧下さい。平福百穂は白田舎（はくでんしゃ）という，絵画の私塾をもちます。そこでは単に自分が絵を教えるだけではなく，日によって美術史であるとか，あるいは美学や哲学などを講義する，そういう授業を設けていたようです。そこに一人，平福を慕い，足しげく出入りをしていた若き美術史・美学者の金原省吾という人がおりました。その方が，やはり雑誌『アララギ』の百穂追悼号の中で一文を捧げております。金原には「平福百穂先生」という雑誌『中央美術』の平福百穂追悼号の中に掲載した文章もあり，大変長い文ですが，（１）と（２）という形で分け，ここではご紹介します。

（１）のところをご覧いただきますと，平福百穂という人物が大変に繊細で，写生をするときでも，どんなに小さなものでもおろそかにすることはない，そういうこだわりの人だったと証言しています。「鋭いのは画面ばかりではなかった。先生自身も実に鋭い方であった。先生には叙説を要しなかった。」というようなことも述べています。性格的に大変頑固な方だったようで，その頑固さゆえに，実は若いときは他の芸術家と何かと対立することが，无声会の中でもあった――そのようなエピソードが別の方の証言であります。

（２）の方をご覧下さい。これは平福百穂が文章を書くのに，非常に苦心していたということを証言するものです。手紙一本を書くのも大変で，何かの文章を書かなくてはいけないとき，金原省吾に代書させていたと言うのです。金原の証言によれば，百穂は編集者に「いやこれは，金原君に書いてもらったものなので，原稿料をそっちに回してくれ」というふうに言っていたと思われ，そうするとあとから原稿料は直接自

分の方にきた――と言うのです。これは，今でいうところの“ゴーストライター”ということになってしまいますので，本当は隠しておきたいことだと思います。でも，実際にそのようなことがあったのだと思います。しかし，私が一つ思いますのは，金原にしても，誰にしても，若き学者や画学生達というのは，みんな食えないのです。お金がないのです。ですから，少しでもその足しになるようにという，百穂の計らいではなかったのか――と私は思います。そして，多分金原もそのことを言っているのだと思います。でも，史実としては，これは大変に問題なことなのです。そして後半の方で，「先生は実に苦心された。例えば『日本洋画の曙光』で…とあり，実はここを読みますと，金原はこの著作に多くの資料を提供していた――それを，平福百穂が校正を重ねていく上で参考にしながら，書き写したり，直したりしていた，と証言しています。

『日本洋画の曙光』の「巻末記」の部分ですが「…編輯，筆記，校正等については専ら金原省吾，横川三果君を煩わせた」というひとことを，百穂は明記しております。現代の学問では，代筆は絶対にあってはならないことですが，どうもこれが歴史的真実のようです。つまり『日本洋画の曙光』という大著は，多くの人々の手によって実は成り立っていた――でも，何よりも大事なことは，平福百穂の情熱がなければ，秋田蘭画研究は３０年近くの月日をかけて出来上がることはなかったのです。そして，こうした連携がなければ現代に，秋田蘭画派が伝わることがなかった――といっても過言ではないと私は思います。

実はこの『日本洋画の曙光』を文庫版として復刊させるというお話しを，私は岩波書店の方から頂きました。私にとってこれは本当に思いがけないことでありまして，私自身はこの大著を，ずっと学生の頃からコピーで２０年近く勉強しておりました。私自身が『日本洋画曙光』の初版を手に入れたのは，つい１０年程前のことであります。非常に高価な本でもありますし，そう簡単に古書市場に出てくるものでもありませんでしたので，いつか，廉価な形で多くの方に知って頂けるような，そして平福百穂の業績を後世に伝えることができればと，密かに願っておりました。

それが，私自身の著書『秋田蘭画の近代』（東京大学出版会，2009年）のあと，岩波書店の文庫編集部が目を付けてくださいまして，復刊させませんかという声を掛けて頂き，このような形で復刊することが叶いました。実は私がかねてより切に願っていたことがありました。それは初版当時のカラー図版をそのまま使うことで，岩波文庫の形式でありながら，冒頭に全図版３０点を収めることにいたしました。そしてさらに，本来の初版にはない３１枚目の図版というので，文庫版には直武筆のあの「不忍池図」をおさめることにいたしました。

これは，私が平福百穂に捧げる最大のオマージュであります。後世に平福百穂の秋田蘭画研究の重要性と，そしてまた小田野直武の「不忍池図」を通して，初めて平福百穂の功績を知る方にも，その両方に対してメッセージとして，このような編集をいたしました。

本日は暑い中，本当にたくさん皆様にお集まりいただきまして誠にありがとうございました。このお話の続きはどうぞ私の著作と，そして，出来ましたら書店でこのぶ厚い岩波文庫をお手に取って頂き，傍において親しくお読みいただければ幸いでございます。長時間にわたりましてのご静聴，誠にありがとうございました。

第65回全国造形教育研究大会　2012／沖縄大会

～太陽（ティーダ）の島から発信する造形教育～　に参加して

秋田県造形教育研究会　会長 芦　原　清　巳

1　はじめに

平成24年８月１日（水）～３日（金），沖縄県浦添市立浦添小学校・浦添中学校を会場に全国から約800名が参加し，全国造形教育研究大会が開催された。テーマ～太陽の島から発信する造形教育～のもと，公開保育１，公開授業（小11・中３）の合計14の授業提示と実践事例（小18・中９）の合計27の実践発表が行われた。沖縄県は今回で４度目の全国大会で，全国でも全国大会を打てる有数の県である。今回は私と事務局の小野先生と二人で参加した。大会期間中は，沖縄のエメラルドグリーンの海とまぶしい太陽を想像していたが，折しも台風９号（石垣島方面）と台風10号（宮崎方面）に挟まれ，３日間は曇り空で秋田より涼しく，最終日にやっと南国らしい太陽の島となりました。

2　校種別部会・全国代議委員会（１日目）

午後から，全国小学校部会に出席し，各都道府県との情報交換を行った。その後，東京都新宿区立愛日小学校，平田耕介先生から実践事例発表が行われた。東京都の図工の先生はほとんどが専科の教諭で，数年に１回，秋に開催される「校内展覧会」の紹介であった。各学年での協同作品がメインで，体育館や校庭を利用した大きな作品でスケールが大きく，まさに体全体を働かせ、創作する体験が重視されていた。展覧会を通した保護者や地域とのつながりをとても大事にした企画であった。

その後，全国代議委員会が開催された。全国造形教育連盟委員長については，引き続き永関和雄先生が再任された。2012年度の活動方針を確認し，今後の大会開催の見通しを確認した。次期大会開催県の東京都から第１次案内があり，平成25年11月28日（木），29日（金）に江東区立南砂小学校・墨田区立両国中学校を会場に開催されるとのことであった。各校種，各地区の情報交換を行い，本大会の大会宣言を確認した。

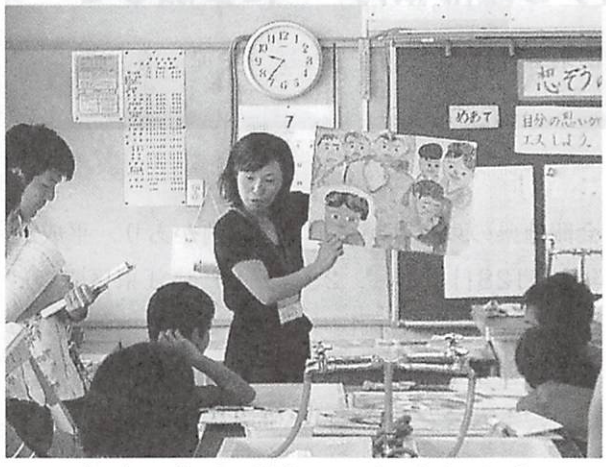
3　公開授業・分科会（２日目）

浦添小学校から４つの授業，他地区から７つの出張授業の合計11の公開授業が行われた。さすが，沖縄だけに，校舎は全館冷房で，廊下も涼しかった。題材には，立体「漆喰シーサー」工作「かりゆしモビール」，木版画「イメージを広げてわしたウチナー」など郷土色豊かな題材などもあり，沖縄ならではの授業で大変好評であった。

【５年　立体　ゆかいな漆喰シーサー】

主に中・高学年を参観してきたが，子どもたちは素直で集中しており，秋田県と変わらない素朴な印象を受けた。絵画などは大変レベルが高く，丁寧に指導されている跡が見えた。全体的に感じたことは，絵画，立体，工作，鑑賞とも教師主導型が中心で，表現技法やスキルなどが子どもたちに徹底されており，型にはまった授業が多いような印象を受けた。しかしながら、確かな指導が作

品に反映されており，作品のクオリティーが大変高かった。作品の広がりや発展性などがあれば，さらに楽しく、創造性豊かな活動になりそうな気がした。

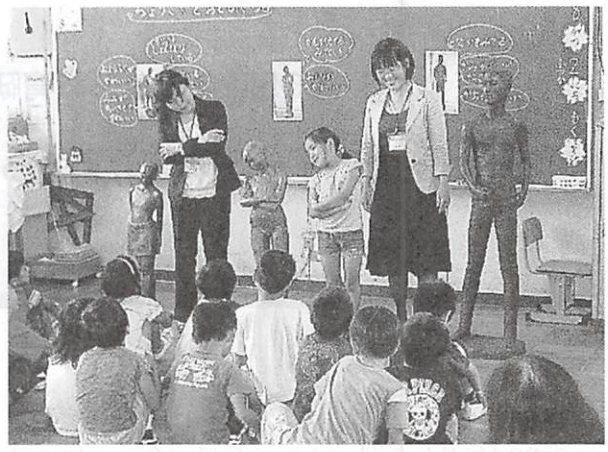


【5年　絵画　想像のつばさを広げて】

分科会では，高学年のひとつに参加した。午前は公開授業を受けての県内からの実践発表，午後からは，東京都と福島県の発表を聞いた。県内からは対話型鑑賞の活動としてアートカードを使い，ゲーム的要素を取り入れた絵の見方や感じ方を深める授業の紹介があった。

【4年　版画　わしたウチナー】

午後からは，他県からの発表で，特に東京都の「子どもにアートが生まれるとき」と題して，ハロゲンライトを使って自分の思いを表現する活動やみんなで段ボールを使い，巨大な家をつくる活動などダイナミックな取り組みが刺激的であった。新しいモノやコトの出会いから生まれる発見，喜びから，子どもたちの心が動き，表現が始まる内容で大変興味深い題材であった。



【1年　鑑賞「ちょうこく」とおともだち】

4　レセプション（2日目　夜）

2日目の夜，浦添市社会福祉センターの大研修室でレセプションが開催された。約140名が参加し，立食形式で，互いに情報交換をすることができた。特に大学の先生や文科省調査官，各県の代表者と造形教育に関するいろいろなお話をすることができた。やはり，東北大会と同じように，全国とのつながりを持つ良い機会となった。

5　文科省特別講演・記念講演（3日目）

最終日は，浦添市てだこホールを会場に文科省教科調査官によるジョイント講演会，全体会，記念講演会が行われた。

「子どもの学びと小・中学校のつながり」と題して岡田京子・東良雅人教科調査官の二人による講演会は圧巻であった。

造形教育活動全般を小学校での目線で捉えた活動，中学校での目線で捉えた活動として，二人で交互に発表し合い，発達段階を踏まえた系統性のある指導が一番大切であるということを再確認することができた。新しい試みとして初めて二人で講演したらしく，時間配分などが難しかったようだが，新学習指導要領に合わせ，これからの造形教育を大変わかりやすく解説してくれた時間となった。

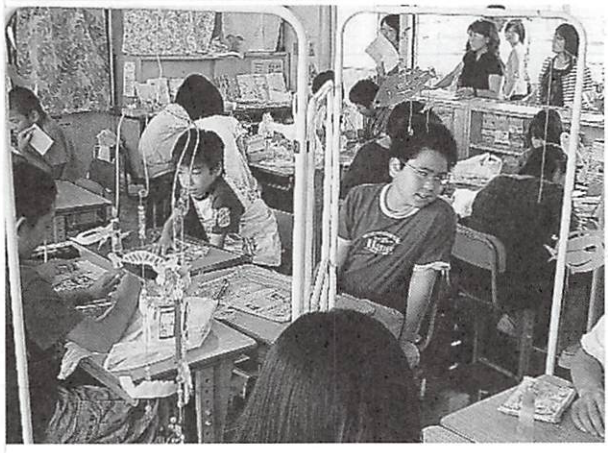
午後からは琉球大学名誉教授，稲嶺成祚先生が「図画工作（美術科）で教えてほしいこと」と題して記念講演を行った。元沖縄県の造形教育連盟の会長であり，長年培ったきて造形教育の集大成をまとめたお話であった。図工の生活技術的部分

として写実的な描き方と色の調和について重要であり，特に子どもたちに身につけてほしいこととして，基本的な４つの絵画空間（垂直・水平・斜上・透視）の概念を指導する必要があるという内容でした。大変わかりやすい説明で，小学校中学年時には，こうしたきちんとした写実的な概念を身につけさせることが，高学年，中学校へとうまくつながっていくのではないかと感じた。

６　終わりに

３日間という長い期間の全国大会でしたが，公開授業，分科会，実践発表，記念講演と参観，拝聴することができました。沖縄の子どもたちの屈託のない笑顔と素直な眼差しで取り組む姿は秋田県と全く同じだなと感じたし，全国の造形仲間と今後の造形教育を語ったり，親睦を深めたりと大変有意義な３日間となりました。

最終日には沖縄のまぶしい太陽（ティーダ），エメラルドグリーンの海，真っ赤なブーゲンビリアが顔を出し，「ティーダの島から発信する造形教育」に花を添えてくれました。



【６年　工作　かりゆしモビール】

平成24年度　秋田県造形教育研究会　役員

1	鹿角	石岡ひな子	尾去沢小学校	
2	大館北秋	永井孝久	雪沢小学校	
3	能代山本	佐々木彰子	山本中学校	副会長
4	男鹿	西村隆	船越小学校	
5	潟上南秋	工藤光男	東湖小学校	
6	秋田市	佐藤一彦	秋田北中学校	副会長
7	本荘・由利	石井真理子	象潟中学校	
8	大仙	小原靖	千屋小学校	副会長
9	横手	木村芳孝	横手南小学校	
10	湯沢雄勝	芦原清巳	三関小学校	会長
11	会長	芦原清巳	三関小学校	
12	監事	加賀谷政広	城南中学校	
13	監事	工藤圭文	港北小学校	
14	鹿角	海沼智恵子	尾去沢小学校	
15	大館北秋	佐々木亜希子	第一中学校	
16	能代山本	渡部悦子	能代第二中学校	
17	男鹿	伊藤覚	男鹿南中学校	
18	潟上南秋	都留賀津人	天王南中学校	
19	秋田市	中村紀幸	勝平中学校	
20	本荘・由利	木内衛	本荘東中学校	
21	大仙	高橋涼	大曲南中学校	
22	横手	佐藤朋子	山内中学校	
23	湯沢雄勝	三浦秀巳	三梨小学校	
24	幹事長	小野哲	種平小学校	事務局・ホームページ担当
25	副幹事長	黒沢淳	泉小学校	事務局補助
26	幹事	三浦直樹	秋田北中学校	美術展主担当
27	幹事	田口香奈美	広面小学校	造形秋田主担当
28	幹事	村山祥子	旭川小学校	会計担当
29	幹事	加藤義昭	川添小学校	研究部
30	幹事	榎実和子	浜田小学校	研究部
31	幹事	伊藤知佐子	土崎中学校	美術展副担当
32	監事	今野雅子	勝平小学校千秋分校	造形秋田副担当

秋田県造形教育研究会事務局
〒010－1224　秋田県秋田市雄和種沢字戸草沢209
TEL 018－886－2594
FAX 018－886－3231
秋田市立種平小学校
幹事長　小　野　　哲